

モンゴル研修報告書 2011

2011 Study Tour, Mongolia



関西学院大学総合政策学部上野研究室

2011 年度研究演習 I

School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University



アジア都市コミュニティー研究センター
Urban Community Research Center for Asia

目次

はじめに.....	3
1. モンゴル研修を行うにあたって.....	7
2. 研修日程.....	8
3. 研修報告.....	13
3-1 在モンゴル日本大使館.....	13
3-2 Zorig Foundation.....	16
3-3 ダンバダルジャゲル地区.....	18
3-4 ダンバダルジャ日本人墓地.....	23
3-5 JICA.....	25
3-6 ナランギンエンゲル廃棄物処分場.....	32
3-7 58番学校.....	33
3-8 エンフチロン大学近先生との交流.....	34
3-9 ゴミ問題プレゼンテーション・紙芝居.....	36
3-10 防災に関するプレゼンテーション.....	39
3-11 クリーンアップ活動、小学生との交流会.....	41
3-12 エンフチロン大学訪問.....	44
4. ホームステイ体験談.....	46
5. ホームステイアンケート結果.....	65

はじめに

—研究演習担当教授からのメッセージ—

上野研究室は 2006 年に初めてモンゴルでの研修旅行を行ってから、'07、' 08、'09、'10 年、そして本年、'11 年、と 6 年に亘って研修を続けてきました。さらに加えて、2010 年、11 年 2 回続けて、関学三田キャンパスで、研修の成果を報告し、両国の交流を促進する、モンゴリア・ウィークを開催しました。当報告書は参加学生による 2011 年度の研修報告です。私は 2013 年 3 月をもって関学から定年退職となりますので、実質的には 3 回生の研修旅行としては 2011 年が最後となり、報告書もひとまずこれが最終版となります。その意味で、出来上がったものを見てひとしおの思いがありますが、身びいきと言われようとも、良き報告書であると誇らしく思います。これまでの報告書と合わせて、ぜひ多くの方に見ていただきたいと願います。(全報告書は <http://www.ucrca.org> モンゴル研究報告書に載っています。)

● 研修の目的

モンゴル研修は私の関学就任の第 1 年目 2005 年には間に合いませんでしたが、以後、当ゼミ活動の中核をなすものとなってきました。なぜモンゴル研修かについては、これまでも各年の報告書に繰り返し述べてきましたが、私のゼミ生の教育の信念、すなわち、ゼミ生諸君を、生涯学び考え、行動する人間、「地球儀をこころに」、関学のモットーである「地球市民」になってもらうことにあります。その育成が、私の中長期の達成目標・アウトカムです。これは初年度から変わりません。そのための良き手法のひとつが研修旅行であると考えてきました。

私は大学卒業後四十余年—今や 67 歳 (!) ですが—、横道や回り道をしつつ、そのときそのときどう生きるか生きたいか、何が自分に出来るのか、何を自分に課すのか、学び続け、考え続けてきました。

関学に来た 2005 年以前の 20 年ほどは、主に米国ワシントンのシンクタンクで「政策研究」に従事しました。厳しい米国での研究生活のなかで、私は「市民社会」「デモクラシー」「政策」という、人生をかけて希求する価値のある課題と出遭いました。今、私がこの年齢をもって、大学教育の場で出来ること、果たせる責任の一つは、若いあなた方、学生が、人生に追求すべき、生涯の学びの課題を発見するのを助ける、そうした機会を揃えることであると思います。

その機会として、出来るならば学生は大学卒業までに、一度でも外の社会を見、学んでくることが大事だと思います。日本以外の国、外の世界を知ることによって、よさも悪さも、強さも弱さも含めて、私たち自身と日本自身を知ることができます。留学生を受け入れるのもこの点での関与をしてくれるからです。そして私たちにとって価値あるものと、他の

国や人々にとって価値あるものは違うということ、異なる価値があり、そして異なっていること、違いの中から違いを超えて互いに得るものがあり、国境を超えて、新たなよりよき価値の形成ができるということを学んでほしいのです。今や、多くの学生が、とても自由に海外に出るチャンスには恵まれています、出来ればゼミとしてある一定のところフィールド、実習の場をもって、継続的に一緒に研修したいというのが、私の考えでした。

●モンゴルとの関係。

なぜそれではモンゴルか、なのですが、実は 1996 年から 1999 年までの丸 4 年間、私の夫は世界銀行を離れ、JICA 派遣の専門家としてモンゴル国財務省のアドバイザーとしてウランバートルに赴任していました。その間私は娘を連れてワシントンから毎年 1, 2 回、夫の赴任地へ地球半周を飛びました。それがモンゴルを知り、そして素晴らしい友人を得るきっかけとなったのです。人生は面白いもので、関学に来てすぐに「人と時と志(思い)」が編みなおされて繋がって、みんなをモンゴルに連れて行けることになったのです。正直のところ私の体力とエネルギーからみて、新しいフィールドの開拓は無理があったのです。

丁度 2006 年ごろ、民主化と市場経済化 17 年ほどを経て、モンゴルは中央アジア移行国のなかでは優等生でマクロ経済的には成功モデルといわれていました。この成功は日本の支援も含めた世界の支援がよく機能した成果と考えられます。しかしその一方で、ここ数年では、モンゴルの様相、特に経済は大きく激動し変化しています。鉱物資源に依存する資源立国は、これから数年 GDP 年率 20% という驚異的成長を遂げると予測されます。このことにより、モンゴルは忘れられていたジンギスカン伝説の国から、世界が注目する、成長国として浮かび上がってきたのです。ですからモンゴルは一般的な概念からいうところの、東アジアに見られる、貧困の中にある、途上国とは言えません。しかし近代化民主化の途上にある、様々な課題を抱えた国であることは確かです。中でも、汚職を含めた政治・社会的問題、激化する所得格差、間に合わない都市住宅インフラ整備、公害と健康医療問題、自然環境破壊の問題は日々深刻さを増しています。いわばモンゴルは、ゼミが取り組んだ 7 年前より、極めて希有な対象国になってきたと言えるかもしれません。

●研究課題の探究

モンゴル研修では、1 年目でおおまかなモンゴルの状況、ウランバートルの状況を把握しました。そしてことに都市政策関連ゼミとして、途上国の都市住宅問題が喫緊の取り組むべき問題であることを認識したのが 2006 年度の成果でした。

この問題解決のためにミクロで有効なことが何かを探ってみようと思ったのが 2007 年の研修活動と調査の焦点でした。援助に関わるさまざまな機関と責任者の方々からの講義を受けました。都市問題と住宅問題の基本を都市居住の原点、：コミュニティーに置くことが非常に重要であることが、開発理論からでなく、踏査を通じて見えてきました。

2008 年度には、日本の JICA による都市マスタープラン研究を知り、その中でことにモンゴル科学技術大学の Purev-Erdene 先生のゲル地区改良の提案と活動に出会い、これへの

貢献を考えた調査を行いました。この関係を土台に 2009 年度の調査は、コミュニティーの現状と問題を、子供たち、小中高学生の GIS を使った生活圈調査から探ってみることとしました。これは今後のすべての援助及び社会改革のカギとなる、コミュニティー・ビルディングということ、すなわちコミュニティー形成と内発的開発、住民による、住民のための、住民の計画と参加、プロセス、過程をつくりだしていくことが最も大事な行為であるという理念に立ち、私たちが出来る、働きかけの一つとしての調査でした。

2010 年 3 月には限られた関係者のみでしたが、各年夏の間となる冬季調査を行いました。零下 25 度 C のウランバーを訪ね、冬季の都市問題を実感することになりましたが、このときに 9 月調査のためのカウンターパートを作り、加えて、ゲルを購入しました！

この経過を経て行われたのが 2010 年の研修旅行です。2010 年はこれまでの蓄積の上に立って、大きな飛躍をしました。それはこれまでの学びと研修から、私たちの出来る働きかけ、小さくもひとつの行動を起こして、持続性につながる「機構」をつくり出したことにあります。

●UCRCA への継承

2008 年より 2010 年の 3 年間、文部省科学研究費「途上国の住宅基盤整備制度構築の研究：モンゴルの都市ゲル地区を事例として」を得ました。これは住宅政策を基軸として、住宅基礎情報を整備するための機構の構築を目指す研究でした。

一方、2009 年に 3 年期限の関学特別プロジェクトとして「アジア都市コミュニティーセンター：Urban Community Research Center for Asia (UCRCA)」を設置しました。これは上野研究室のゼミ活動をより広範な研究活動につなげるための装置が必要と考えたからです。UCRCA は特にモンゴルのコミュニティーの改善のための様々な試みを実施する手だてとすることにありました。これらいずれも 2006 年から積み重ねてきたゼミのモンゴル研修旅行で得られた知見とネットワークによるアウトプットといえます。

そこで、この足固めのうえに 2010 年、UCRCA は Zorig Foundation との協働活動 Community Building Young Leadership Program を設置し、その対象プロジェクトとしてダンバダルジャ地区第 58 番高校に Community Building Young Leadership Club (CBYL クラブ)をつくりました。この経過は昨年度 2010 年の報告書に詳しく述べられています。簡単にいえば、これは高校生の自発的参加において 1 年間、コミュニティー・サービスを促す活動をし、その優秀な修了生に奨学金を与えるものです。Zorig Foundation の研究主任 Badruun Gardi の指導により、このプログラムには 10 人の学生が参加し、2 つのコミュニティー活動を行いました。これは 2011 年 7 月に終了し、2 名の学生に大学奨学金を出しました。コミュニティー意識の醸成という小さいながら非常に重要な種まきをしたといえるでしょう。

モンゴル研修はひとまず今回で終了となります。今後は UCRCA に活動を継承していくことを考えています。

これまで長く、この研修にご協力いただいた日本大使館、JICA モンゴルオフィス、エンフチロン大学の近彩先生、第 58 番高校の校長、Handaa 先生始め、教員、大勢の中学高校生、講義いただいた講師の方々、資料提供くださった方々、そして UCRCA 組織パートナーの Zorig Foundation のディレクター、Badruun Gardi、学生を受け入れて心をこめてもてなして下さったホームステイ先の家族（何と素晴らしい人たちか！）日本語通訳から運手さんまで、多くの皆様の温かいご協力に心から感謝いたします。

そして、上野ゼミの卒業生諸君、あなたたちに心から感謝。今見事に社会に飛び立ち、世界に飛び立ち、働いているあなたたちこそ、ゼミの誇りであり、希望そのものです。

上野真城子

総合政策学部教授

UCRCA 代表

1. モンゴル研修を行うにあたって

【コンセプト】

『モンゴルと日本の架橋になる (Act as a bridge between Mongolia and Japan) 』

【ミッション】

- 東日本大震災で多くの支援をしていただいたことへの感謝の気持ちを伝える
- モンゴル人には日本のことを、日本人にはモンゴルのことを知ってもらう
- 日本人として、モンゴルでも起こりうる地震のために「防災」というものを伝える

【このコンセプトに至った経緯】

私たち上野ゼミ3回生は、6年に渡りモンゴル研修を行っている。今年も、例年通り、モンゴル研修へ行く前提で、4月からゼミが始まったのだが、3月11日に未曾有の大震災が起これ、私たちは日本が今このような大変な状況の中、モンゴル研修へ行くべきなのか、について話し合うことになった。その話し合いの中で、たくさんの国の中でも特に、多くの支援をしてくれたモンゴルに感謝の気持ちを直接伝えることができる、とてもいい機会なのではないか。また、モンゴルからの支援金の使われ方や日本の現状を直接伝えることができるのも、私たちだからできることである。また、モンゴルから多くの支援をもらったことを日本人である私たちは、あまり知らなかったので、モンゴルについて研究を行う私たちが日本の人々に伝えなくてはいけない、と思った。また、モンゴルについて調べていく中で、モンゴルにも大きな断層があり、地震が起こる可能性があることが分かった。地震大国として、地震というものをあまり知らないモンゴルの人たちに「防災」という考え方を伝えよう、ということになった。モンゴルと日本、双方に良い影響を与え、モンゴルと日本を繋げる架橋のような存在になれるように、ということで、このコンセプトに決まった。(文責：芝田真子)

2. 研修日程

8月29日

- 10:00 関空発
- 12:15 北京着
- 14:00～ 北京観光

8月30日

- 7:45 北京発（国際列車）
車中泊

8月31日

- 13:15 ウランバートル着
- 14:20 観光（マンガン寺、スカイマーケットなど）
- 19:20 ホテル（Elegance Plaza）着

9月1日

- 9:30 在モンゴル日本大使館訪問
- 12:00 Zorig Foundation 訪問
バイラさんの講義
- 13:30 モンゴリアンレストランにて昼食
- 16:00 ダンバダルジャゲル地区見学
- 16:40 日本人墓地跡

9月2日

- 9:50 JICA モンゴル訪問
- 13:00 ナランギンエンゲル廃棄物処分場見学
- 15:00 58番学校訪問、打ち合わせ
- 16:30 町散策
- 19:00 ホテルにてミーティング

9月3日

- 12:40 テレルジキャンプ場着
- 13:00 羊の屠殺見学、昼食
- 14:00 山登り
- 16:00 乗馬体験
- 21:30 Zorig Foundation のスタッフ達と食事

9月4日

- 10:30 プレゼンの予行演習
- 13:00 トゥール川見学
- 20:00 ホテルにて、プレゼン内容をモンゴル訳

9月5日

- 14:00 58番学校にて打ち合わせ
- 16:00 58番学校イベントの買い出し
- 21:00 ホテルにて近 彩先生による講義

9月6日

- 8:30 58番学校到着
- 9:30 プレゼン (対象:4年生)
- 12:00 プレゼン (対象:8、9年生)
- 14:00 クリーンアッププロジェクト
- 15:00 交流会
- 18:00 Zorig Foundation にて長山さんによる講義
- 20:30 上野宏 教授、長山さん達と共に夕食

9月7日

- 10:00 エンフチロン大学訪問、交流
- 12:00 町散策
- 16:00 それぞれのホームステイ先へ出発

9月8日

- 10:00 ホテル到着
- 14:20 ザイサントルコイ観光
- 18:00 ウランバートル発
- 20:10 北京着

9月9日

12:00 北京空港にて昼食

14:20 北京発

18:00 関空着

ホテル

私たちは8月31日から9月8日(テレルジキャンプ・ホームステイを除く7日間)、ウランバートル市内にある Elegance Hotel に滞在した。ホテルは8階建てで、1階にはフロントとレストランがあった。フロントのスタッフは、簡単な英語なら通じたが、意思疎通が難しいことが何度かあった。また、食事(特に朝食)はホテル内のレストランを使用することが多く、朝食にはパンとスープが用意された。



部屋については、男子3名の部屋を1つ、女子2名の部屋を3つ、女子3名の部屋を1つの計5部屋に分かれて滞在した。部屋の設備は思っていた以上に揃っており、大きなベッドに椅子、水洗トイレ、シャワーなどがあった。第一印象がとても良かったので、快適に過ごせると思っていたが、過ごしているうちに問題がいくつも出てきた。その中でも一番の問題は、シャ

ワワーの温水が出なくなったことである。これは、どの部屋でも毎日のように起きていた。また、時には停電になったこともあり、モンゴルのインフラ整備の不十分さを感じることができた。

私たちは、このホテルでモンゴルの食事やインフラ整備の不十分さ、そして日本とは異なるホテルサービスなどを自分たちの体で感じ取ることができ、本当に学びの多い経験となった。



食事

モンゴルでは人間は「赤い食べ物」と「白い食べ物」の2つの食べ物で生きており、赤が肉で、白が乳製品とされている。肉料理が中心な遊牧民では、乳製品は野菜がわりになる大切な食べ物である。また、魚は神聖なものとされているため、ほとんど食すことがない。

モンゴル料理は羊肉を使ったものが非常に多く、羊肉はモンゴル人にとって欠かせないものであるといえるだろう。モンゴルでは羊肉は安価で、多くのモンゴル人が食している。研修中のキャンプでは、羊の解体を見学し、夕食は解体された羊の肉と内臓がメインだった。モンゴルの羊肉は日本のものよりも、脂がのっていて新鮮であるが、味付けが非常にシンプルなため、口には合わないと感じる人もいた。

また研修中に訪れたレストランでは、「ボウズ」というモンゴルの伝統的な料理も食べた。ボウズは、中国のバオズ（包子）に由来する蒸した羊肉ギョウザである。その他に、「ホーショール」というボウズの揚げギョウザ版の料理もあった。これらの料理は、ホームステイ先にも出てきており、家庭で日常的に食べられている料理のひとつである。



そして、モンゴルの伝統的なお茶である「ツーツァイ」。これは、日本でいうミルクティーのような見た目、茶葉を湯で沸かし、牛乳と塩をいれたモンゴルのお茶である。独特な茶葉のにおいと塩味で、美味しいと感じるメンバーは少なかったようだ。その他にも、馬乳酒というアルコールを含む乳製品がある。発酵させているため強い酸味のあるお酒で、ヨーグルトに近い味である。



モンゴルのスーパーでは、韓国や中国、ロシアからの輸入品が非常に多く、お菓子類もほとんど輸入品だった。その中から、モンゴルのお菓子を探したところ、「アーロール（乾燥したチーズ）」という白いお菓子を見つけることができた。アーロールはかたいものから柔らかいものまであり、味は甘みがなくヨーグルトをさらに酸味を強くした味がする独特なお菓子だった。

3. 研修報告

3-1：在モンゴル日本大使館においての講義

場所：在モンゴル日本大使館

日時：2011年9月1日

講師：大津さん

私たち上野ゼミはモンゴル大使館へ行ってモンゴルと日本の関係の現状、さらに言えば3.11後のモンゴルと日本、両国の関係についての話を大津氏からお聞きしたことをまとめたものである。



写真1 出所：上野ゼミ

1-1.日蒙関係の歴史

モンゴルは1911年の辛亥革命時に中国の清朝から独立し、1921年にモンゴル共和国を建国させた世界で旧ソ連に続く2番目の社会主義国である。日本との交流の歴史としては13世紀、当時のモンゴル帝国が鎌倉幕府である日本を襲来した元寇からはじまる。長い歴史の中交流を繰り返して関係をお互いに作ってきた。1960年代～1970年代はじめまでは日本はモンゴル共和国との交流はなかった。しかし、1972年に外交関係が樹立し、日本とモンゴルが公に交流

た40年と短い歴史である。1990年になると旧ソ連、東欧圏の改革に呼応する形で民主化し、現在のモンゴル国が誕生した。日本はモンゴルが民主化・市場経済に移行した時に支援した最大援助給与国であり、良好な関係を築いている。

1-2.モンゴルの原発に対する意識

モンゴル国は日本とは違ってとても豊富な資源を所有する国である。ここで懸念される点として核問題が挙げられる。3.11の東日本大震災後に米国と日本が使用済み核燃料をモンゴルに廃棄するという情報が流れたが、この情報は誤報であり、日本政府もモンゴル政府もこの情報について否定している。3.11以前のモンゴルでは原発推進派の勢力は大きかったが、福島原発の事故を受けて勢力は収縮し、現在は反対意見が多くなっている。しかし、モンゴル人には使用済み核燃料を受け入れたいという構想を持つ者もいる。それはモンゴルの国内に大量のウランが埋蔵されているからである。モンゴルでウランを採掘し、核燃料に加工して外国に売って使用済み核燃料を回収するというものである。現在のモンゴルは原発建設反対派の意見が多く挙げられており、今後モンゴルに原発開発が行われるかは来年行われる総選挙で明らかになるだろう。

1-3.モンゴルの教育制度

モンゴルの教育制度は旧ソ連の教育制度に沿っており、8歳～18歳までの10年制の義務教育となっている。中には8年制で学校を卒業して職人の道へ進む者もいる。しかしここでの問題点はモンゴルが10年生の義務教育であることから海外に留学するのが困難になっていることである。通常、海外留学するには12年間の教育を受けなければ外国の学校に入学する事は認められない。それによって最近では外国への留学の為に7歳や8歳から学校に入学する傾向が高く、12年生の学校も増えてきている。モンゴルの教育の中身としてはグローバル化に伴って科目内容は日本の教育と変わらないものである。モンゴルでは2年生のうちから国語の文法を学んだり詩の暗唱をしたりと旧ソ連の教育の名残を受けつつ、日本の教育よりも高度な学習を低学年のうちから行っている。また、日本が一時的なゆとり教育を行っている間にモンゴルの教育は日本の高校生が学習するような数学をモンゴルでは行っていた。現在は日本語を含め30カ国もの外国語を習う事が出来、その中には日本語も含まれている。その他にも、家庭教育においても小さいころから厳しい躾を受けて、仕事の手伝いをさせられている。

1-4.モンゴルの都市環境

モンゴルの主な災害に雪害と草原火災がある。草原火災は乾燥地であるモンゴルにとっては大きな打撃になると言っても過言ではない。一度草原に火が付いてしまうと、消し止めるのは困難である。雪害は夏の降水量が少ない年に起きる自然災害で、雨が

降らないと草が生えずに冬を迎える為、家畜の体力が十分蓄えられていので死んで行ってしまうケースがあとを絶たない。2009年、2010年の冬は雪害が酷く、30万頭の家畜が死ぬ被害があり、モンゴル人にとって財産である家畜を守る為に個人や政府は草を乾燥させて肥料にするなど対策をしている。モンゴルは地震が過去80年ないと言われている。

3.11以降、モンゴルでも地震に対する意識が急速に高まっている。モンゴルは地震がないとされる国だが、実際には活断層が存在し、防災対策が必要である。しかし、モンゴルの建築の現状を見てみると、全く防災対策を加味されていない。20階建ての高層ビルは積み木のように積まれており、柱は鉄筋コンクリート、壁は不燃物で固めたもので安全対策はされていない。万が一ウランバートルで地震が起こると数百万人が瓦礫に生き埋めになったり、下敷きになったりする危険性が非常に高い。他にも旧ソ連時代に建てられた建築物はパネル建築でそれも問題になっている。

1-5.モンゴルの経済状況

社会主義時代のモンゴルは COMECON (Communist Economic community) という東共産諸国の経済協力機構に所属していた。モンゴルの担当は肉やウールで家畜から取れる産品を東欧や旧ソ連に輸出する代わりに、東欧や旧ソ連からは工業製品を輸入していた。1992年に入ると、市場主義経済に一気に転換したため国内では大混乱が起き、店に行っても塩しか売られてないという厳しい日々が続いた。世界銀行やIMFの力を借りて立て直したが、なかなか落ち

着かず、94年の日本の援助によって漸く落ち着いた。94年以降の成長は現在も続いており、世界銀行によると5年10年後には成長率は20%を超える事が予想されている。モンゴルは鉱物資源を多く保有していて今後は資源を外国に売って行くと予想されているからだ。これからのモンゴルは遊牧と資源を軸とした産業が発展していく事になるが、モンゴルは製造業が発達していない

ため、一時的に成長できても50年後の先を見ると今後の経済の課題として製造業を発達させなければならない。例えば、鉱物資源の一つである石炭をコークスに加工するなどのある程度の加工技術を習得して製造業を発展させないと永続的な経済発展には繋がらないだろう。

(文責：岩崎 麻里)

3-2 : Zorig Foundation 訪問

場所 : Zorig Foundation 事務所

日時 : 2011 年 9 月 1 日

Zorig Foundation はモンゴルの社会を救うため、1998 年に Zorig の家族や友達などで非営利、非政府組織として設立された。

任務

- ・モンゴル社会で国内価値を広める
- ・人権、政治的な自由、社会的公正を強固なものにする
- ・市民に対する政府のシステムの透明性や説明責任

これらの任務を達成するために、Zorig Foundation では、若者の教育・良質な統治・コミュニティー形成の3つの分野に力を入れて活動している。

1. 若者の政治的、市民的教育を改善し、国内の活動に参加
2. 市民の反汚職や政治的倫理、透明性への意識の向上
3. 人権や自由に関する法的制定の改善に貢献し、公民にその情報を広める

具体的な取り組み

1. 民主政治、良質な統治、政治の透明性
2. 若者に対する教育
 - 大学奨学金プログラム (2000-2009)
 - リーダーシッププログラム (2003-2009)
3. コミュニティー計画

Zorig Foundation と上野ゼミとの関係

昨年度、コミュニティー開発青少年リーダーシップ・プログラム (Community

この Zorig Foundation の協働のもとに 58 番学校でクラブ活動としてスタート。



写真1 Zorig Foundation 外観

話 : バイラ氏

2006 年モンゴルの大学から編入して秋田国際教養大学国際関係学部へ。その大学中で1年間ロシアに留学し、再び日本で2, 3年勉強した後、2011年3月卒業。

4月にモンゴルに戻ってきて8月1日からZorigに。アメリカのフルブライト・プログラムで、2012年8月1日からアメリカ留学予定。夢は外交史。

日本での生活はバリアフリーで便利だった。一方で、モンゴルの障害者の人々はバリアフリーも整っておらず、何の施設もないから家にこもるしかないという現状。このような現状を多くの人に知ってもらって、障害のある人々も住みやすいモンゴルの街にしていきたい。

*モンゴルの国民意識

好きな国、仲良くやっていきたい国ランキングでは、隣国であるロシアや中国を抑えて、日本が第1位である。その理由の1つとして、日本からのODAなどの援助が多いという情報が国民に行き渡っているということがある。ロシアや中国は、モンゴルの経済情勢を大きく左右する絶大な力を持っているので、その関係を上手く大事に保とうとしている。ランキングその他は、2位ロシア、3位アメリカ、4位韓国、5位中国であった。

*モンゴルの家庭・教育

特に遊牧民の間では、お金より家庭の幸せが何より大事という意識が高い。男性は自分が働いて女性を大学に行かせてあげようとする。このような一因から、モンゴルの教育を受ける男女別の割合は、男性30%、女性70%で女性のほうが学歴があることが特徴である。しかし、政治の上ではやはり男性の割合が高い。近年、モンゴルから留学に行く学生が増えている。アメリカへの留学が1番多く、次に多いのが日本であった。

*モンゴルのその他の特徴

- ・テレビ番組が国際色豊かで、このマスメディアを利用して外国語を勉強する子供たちが増えている。

- ・遊牧民の生活上、書くことより聞くことのほうが重要視されたため、聞く力、耳の感覚に優れている。このことで、外国語を学ぶことも習得が早いと言われている。

- ・平均寿命が約65歳と短いため、早く結婚

する人が多い。

- ・モンゴルの人口は少ないため、子供を産むことに対する国のサポートが大きい。このため、仕事に関するプレッシャーも少なく、仕事と子育てを両立できる環境にある。

まとめ

Zorig Foundation と上野ゼミは数年で関係を築き上げており、68番学校との中介役や、私たちがモンゴルでさまざまなことをする上でいつも助けとなり、たくさんのことを学ばせてもらった存在である。いつも私たちと連絡を取ってくれていた Gardi Badruun 氏は、私たちのプレゼンテーションを見てもらって評価をいただき、58番学校での本番での参考にさせていただいた。また、何十枚とあるパワーポイントの中の私たちのつたない英語を1枚1枚訂正していただいた。インターンシップ生の Sandagsuren Ulsiikhuu、Enkhbileg Urtnasan などは、私たちよりも年下ながら大きな目標と夢を持ち、とてもしっかりしていた。年齢も近いこともあり英語でたわいもない話をしたり、モンゴルのことやモンゴル語を教えてもらったり、逆に私たちが日本語を教えたりなど、異文化交流も体験することができ、また、同世代の彼らが大きな夢に向かって頑張っている姿を見て私たちはとても良い刺激を受けた。

(文責：升田 有香)

3-3 : ダンバダルジャゲル地区訪問

場所 : ダンバダルジャゲル地区

日時 : 2011 年 9 月 1 日

ゲル地区

1. ゲル地区の概要

1990 年モンゴル国の民主化以降、市場経済化された首都ウランバートル市の人口は現在 100 万を超える規模を持っている。首都へ移住する遊牧民は、伝統的な移動式住居であるゲルで暮らしている。彼らが集まるウランバートル北部の郊外を中心として、スプロール状にゲルが立ち並ぶ地域が存在する。この地域を「ゲル地区」と呼んでいる。ウランバートル市内で、ゲル地区は下の図通りだった。



図 1 : ウランバートル市内のゲル地区分布図

図 1 より、ゲル地区はほとんどウランバートルの中心市街地の北側に広がっており、約 15 万人が生活していると考えられている。ウランバートルの住宅別割合 (図 2) を見ると、約四分の一以上の市民はゲル地

区で生活していることを明らかとなった。

ゲル地区が形成される背景としては 2003 年に、モンゴルで土地の私有化が認められるようになったことが関係している。法律によると人々が 600 平米の土地を無償で手に入れることが出来るようになった。また、ゾドという雪害による、収入の源としての家畜を失われた遊牧民が仕事を探すため、ウランバートルに移住した。これらが原因で、もともと 60 万人を収められるウランバートルのマスタープランを潰してしまったのである。都市は無秩序に拡大し、ゲル地区では様々な問題が発生していった。

今回のモンゴル研修において、この拡大するゲル地区の問題点を探るため、私たちはバスに乗り、タンバダルジャ地区を見学した。もう一つの調査方式として、ホームステイの際に、ゲル地区で暮らしている現地の家族の方々の生活実情について調査を行った。

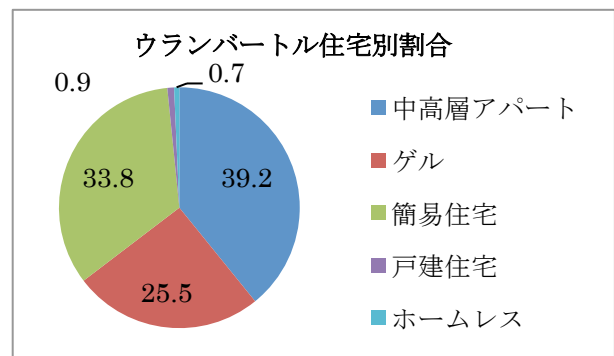


図 2 : ウランバートル住宅別割合

2. ゲル地区における問題点

バスに乗り、目を見たゲル地区における

3つの問題点(ゴミ問題、インフラの未整備問題、住宅の乱立問題)を取り上げたい。実際に現地で取った写真を例に取り上げていく。

2-1. ゴミ問題

ゲル地区で、ゴミを処理するシステムが未整備のままであり、人々がゴミを勝手に捨てることは他人や都市環境に悪い影響を与えることを意識していないことが原因でゲル地区にゴミがあふれていた。



写真1：捨てられた段ボールやプラスチックの袋



写真2：ゴミだらけの様子



写真3：道路端に積もるゴミ

2-2. インフラの未整備問題

ゲル地区における道路整備は不十分であった。住民の多くは塀で敷地を囲み、その敷地以外の残されている場所が道路になっていると考えられる。水たまりができ、ボロボロな道路もあった。とりわけ、泥の道がほとんどであった。



写真4：ゲル地区内の交差点。泥の道路だったので、車が走っている跡がよく見える



写真 5：二つの敷地の塀に挟まれている道路



写真 7：塀と塀の間にブルーのコンテナが挟まれている



写真 6：右上には水がたまっている



写真 8：ゲル地区における建設途中のレンガ造の新築物。屋根は木造

2-3. 住宅の乱立問題

ゲルは、モンゴル伝統的な住宅様式も建物である。写真などでは青空と大草原の間に、白いゲルが一軒建っていて、その隣には羊や牛を飼う遊牧民たちの昔ながらの生活像を見たことがあるかもしれない。しかし実際は多くのゲルが密集している。ゲル地区ではゲルのみではなく、レンガ造の建物も混雑しており、さらには荷物を収めるコンテナも部屋として使われている所もある。



写真 9：遠い所からみると、乱立しているゲル地区

上野ゼミの学生はホームステイ時にも、ゲル地区の実際の住居状況について調査した。ここで、取り上げたい問題点は上下水道に関する問題であった。

まず、ゲル地区では上水道などの基本的なインフラの整備が遅れ、水を汲むときは簡易給水所に行かなければならない。住民たちは毎日バケツで必要な水の量を住む所の近くの給水所から運んできて使用している。水を使うときは、一旦タンクに入れてから使用する。

比較的裕福な家庭では自宅の庭に井戸を掘って、バケツなどを使って水を汲むことができるようになってきている。しかし、蛇口をねじっても、水がほとんど出ない状況もある。それは節水の観念ではなく、上水道がきちんと整備されていなかった証拠である。



写真 10：家庭の水汲み用のバケツ



写真 11：水を使う際に、タンクの中に水を入れる必要がある

次に下水道の整備も問題視されている。ゲル内にはトイレなど水回りの衛生設備が整っていないため、屋外に設置されている。自宅のある敷地内に、深く穴を掘って、その上に、小さな建物を建設することで、トイレが使われている。水は節約できるが、排泄物などの処分は問題である。



写真 12：ゲル地区のトイレ。左下で、固定用のコンクリートブロックは見える



写真 13：トイレの実態。古い形のトイレ

ンゴル研修において、以上取り上げた問題点以外にも冬場に使用するストーブによって起こる大気汚染問題や隣人の人との交流や協力が希薄なコミュニティ問題があげられる。

幸いなことは、モンゴルの人々は日本など他国の支援をもらいながら発展していく過程で、留学していたモンゴルの学生が帰国することで、学んだ知識を生かして各問題の改善に取り組もうとしている。今ゲル地区が直面している諸問題は今後、徐々に解決され、発展していく兆しが見られた。

ゲル地区は様々な問題がある。今回のモ

(文責：沈洋)

3-4：ダンバダルジャ日本人墓地

場所：ダンバダルジャ日本人墓地

日時：2011年9月1日

ダンバダルジャ日本人墓地は日本人抑留者の霊を祭った慰霊公園。

第2次大戦終結後の1945年10月、ソ連シベリアに抑留されていた旧日本軍人の60万人のうち、1万2318人がモンゴル政府に引き渡され、2年間、同国各地で強制労働させられた。このうち1500人以上が、帰国への悲願むなしく異郷で没した。ここはその人たちを慰霊する場所である。

遺骨は既に日本に遺族団によって持ち帰られていて、現在は慰霊碑があるのみ、3年前から植樹活動が行われ、花壇の整備などが進められている。

このダンバダルジャ日本人墓地がつなぐ日本とモンゴルの関係は、遺骨の帰国、慰霊碑建設、地元の道路整備や施設改修・拡張など政府間だけではなく、植林緑化活動にもつながっている。

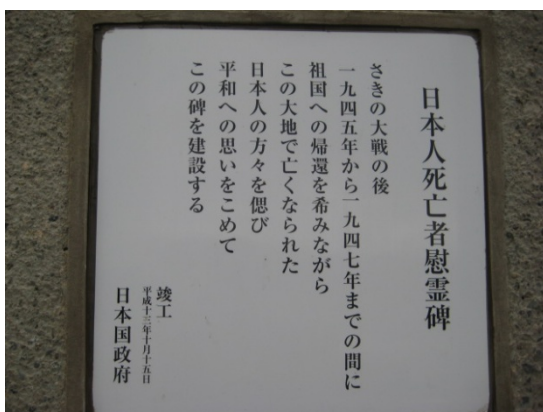


写真1 日本人死亡者慰霊碑



写真2 博物館の内部、皇太子殿下や元首相などが捧げた花輪、16ヶ所の墓地の土、遺書、写真、兵士の名を記したプレート



写真3 「諸子よ祖国日本は 見事に復興しました モンゴルに安らかに眠ってください」と書かれている

この地を訪れてみて、この地で日本人兵士たちがこんなにもたくさん亡くなったこと、しかしその霊を収める墓地や、慰霊碑がこんなにも広大で美しい施設でモンゴルにおいて維持されていることに驚いた。このよ

うなところで日本とモンゴルの交流があったとは全く知らなかった。

慰霊碑や兵士の名前が刻まれたプレートを見て、日本とモンゴルの歴史に触れていることを感じ、何か言葉にならない感慨深いものがあった。

(文責：升田 有香)



写真 4

3-5 : JICA

場所 : JICA モンゴル・オフィス

日時 : 2011年9月2日

講師 : 岩井さん、南さん

岩井さんによる講義

I. 総論

私たち上野ゼミ生は、モンゴル研修3日目に JICA モンゴル事務所を訪問した。まず、岩井さんに総論を話していただいた。現在のモンゴルを抑えるポイントは、「各国ドナーがモンゴルにたくさん入ってきていること」だそうで、世銀、EBRD（欧州復興開発銀行）ADB（アジア開発銀行）など金融系の援助機関や UNDP・UNESCO・UNFPA・UN habitat・WHO などの UN グループが入ってきているようだ。また、バイの機関としては、USAID（アメリカ）・KOICA（韓国）・SWISS AGENCY・GID（ドイツ）がある。ここで、見られる面白い傾向は、「通常4~5年に一度見直しが行われるのに、2011年に JICA、日本政府、ADB、世銀、UN グループ、USAID などの主要機関が一斉に援助方針の見直しをしていること」である。前回援助方針見直しを行った時期は機関によってそれぞれ違うのに、今年一斉に見直しを行っているのはなぜだろうか。それは、モンゴルが「変革期」にあるからだ。つまり、「経済成長期」にあるということである。5年前、一人当たりの GDP は 500 ドルであったのに、たった5年で約 2000 ドルにもなった。IMF や JICA の推計によると、2015年には 5,000 ドル、2020年には 10,000 ドルにもなると言われており、これだけ高い経済成長をしている

伸びている。この経済成長を牽引しているのが、「鉱物資源」である。日本人のモンゴルに対するイメージは、恐らく「牧畜国家」であろう。しかし、実際のモンゴルは、いまや「資源国家」である。現在、モンゴルでは国家戦略的な鉱物資源が中国との国境のところで開発されている。そこでは、金・銀・銅・石炭、特に優良なコークス炭を発掘することができるようだ。この国家戦略的な大規模な鉱物資源の開発は本当に最近に本格化したところであり、「この開発によって、モンゴルの経済成長は著しく成長した」ということがぜひ押さえておきたい1つめのポイントである。

次に、モンゴルの特徴は、「人口と面積」である。モンゴルの面積は日本の4倍もあるにも関わらず、人口はたったの270万人なので、人口密度が世界で1番低い国である。ここから都市問題に入るが、あの狭い首都ウランバートル市にどれだけの人口が集中しているか想像がつかだろうか。なんと、100万人もの人々（人口の45%）が集中しているのだという。現在もなお、年間2~3%ウランバートル市への人口集中は続いている。現在も、ウランバートル市の都市機能がうまく働いているとは言えないのに、さらなる人口集中が続けば都市機能がパンクすることは目に見えている。では、何故人々はウランバートル市に集まってくるのだろうか。それは、やはり職や教育が充実しているという理由が大半なようだ。

このまま人口集中が続けば、都市機能がパンクするだけでなく、様々な都市問題が発生する。ウランバートル市の都市問題こそが、モンゴルを理解するうえで押さえておきたい2つめのポイントだ。現在、ウランバートル市は、渋滞、ゴミ問題、大気汚染、犯罪（重犯罪まではいかない、スリなどの軽犯罪）、エネルギー問題、水問題など本当にたくさんの深刻な問題を抱えている。特に問題となっているのが、「大気汚染問題」だ。この大気汚染問題は、冬場にウランバートル市を囲むゲル地域で石炭を焚くことが原因になっている。石炭を焚くことにより、粉塵煤塵（MPTEEN）が発生し、冬場には霧のようになり、ウランバートル市の空全体をどんよりさせてしまうことが多い。さらに、道路を渡る時ですら、目の前が見えにくいといった状態も引き起こしているようだ。地方からウランバートル市に入ってくる人はタダで土地を貰うことができるのだが、もう市内地は埋まっているので、どんどん山裾のほうへゲル地域が広がっているという。なんと世帯数は20万世帯以上にもなり、これからもどんどんゲル地域が広がっていくことが予想されており、大気汚染問題に対し、効果的な解決策の提案を早急に行うことが必要とされている。

モンゴルを理解するうえで押さえておきたい3つ目のポイントは、「貧困」についてである。先ほども述べたが、モンゴルは経済成長が著しい国である。しかし、それと同時に貧困率も上がっており、貧富の差が広がってきている。現在のモンゴルの貧困率は、40%である。ウランバートル市の貧困率は、40%と比べると少し低くなるが、地方は貧困率が高く、1日2ドル以下で生

計を立てている人々が約4割いるという。しかし、よくよく考えてみると、地方の人々の多くは、従来の牧畜生活を行っているので生活するのにお金がかかっていないだけなのでは？と私は思ったが、真相はまだ明らかになっていない。そして、なぜ経済成長が続くのに貧困率があがり、貧富の差が広がるのかというと、モンゴルで「1990年に民主化」が行われたからだという。1990年以前は、ある意味皆等しく貧しかったが、最低限の生活の保障はされていた。しかし、1990年以降民主化が進み、富める者は富、貧しい者は貧しいままで、貧富の差はどんどん広がっている。この先モンゴルはどうしていくべきなのかということを考える必要がある。

最後にまとめるが、モンゴルを理解するうえで押さえておきたいポイントは、①経済成長（鉱物資源が牽引している）②都市問題③貧困の3つである。

そして、現在JICAは、この「3つのポイント」を柱として今後援助を展開していくようだ。現在、鉱物資源の開発は現在民間ベースで行なわれているが、その開発が持続可能なものになるようにJICAは援助を行っている。そのために日本独自の切り口で、環境対策や排水対策に取り組んでいる。さらに、鉱物資源から得た収入がきちんと今後の開発に使われ、ばらまきにならないようにしなければならない。これが1本目の柱である。2本目の柱はウランバートル市の都市開発、3本目の柱は貧困（inclusive growth）となっている。これを新たな援助方針として、今後4～5年のスパンで展開をしていくということで、JICAは最終的な詰め段階に入っているという。何度も言う

が、モンゴルは「変革期」なのである。それに対する援助が必要なので、冒頭で挙げた主要援助機関も援助方針の見直しを行っているのだ。

II. コミュニティ

現在 JICA では、「コミュニティの意識」をモンゴルに取り入れて街を改善していくという具体的な取り組みを行っている。まず、モンゴルにおけるコミュニティの話をするにあたり、理解しておかなければならないことは、「モンゴルにはコミュニティという概念が存在しない」ということである。これは遊牧民の気質から来ているという考えが有力なようだ。地方でのゲル生活でコミュニティが存在しないのは、仕方がないことであると思う。しかし、問題なのは、たくさんの人が暮らす街にもコミュニティが存在しないことだと岩井さんは仰っていた。

その問題を解決しようと JICA は、「草の根技術協力」という国民参加型のプロジェクトを提案し、ウランバートルから車で約 4 時間半かかる、ボルガンという場所で国際看護協会がスタートさせた。このプロジェクトは、母子保健ボランティアヘルスワーカーの育成および組織化を目的としている。ボランティアヘルスワーカー 1 人 1 人が集落を受け持つて、定期的に集落を回り、相談に乗ったり、色々なアドバイスをしたりするというのがこのプロジェクトの概要である。しかし、このプロジェクトを行うにあたり、「そもそもモンゴル人が、無給のボランティアをするのか？」という疑問や心配の声が挙がっていたようだが、このボランティア活動を通して人の役に立つこと

で、ヘルスワーカーの方々が生きがいを感じており、予想以上にこのプロジェクトは上手く機能しているようである。モンゴルでは、妊娠しても情報がなくどうすればいいのかという基本的な情報すら知らない人が多いので、妊婦や母子がいるところを中心にヘルスケアワーカーを派遣し、**primary health care** の技術を移転するといった具体的な取り組みを行っている。最初は、ヘルスワーカーを受け入れる集落の人々も、ヘルスワーカーに対する認識がないし、全く知らない人とコミュニケーションをとることに何か違和感のようなものを感じていたようだが、「ヘルスワーカーの存在意義」が次第に集落の人々に伝わり、集落の人々とヘルスワーカーの絆が深まってきたようである。そして、多くのヘルスワーカーの方が「集落にコミュニティが実際に生まれてきている」と仰っているようだ。例えば、コミュニティの中で基金を集め、貸してほしいと申請があれば、お金を貸すというような「少額金融プロジェクト」のようなものが始まっている集落もあるというからすごい。このボランティアは、フェーズ 1 として、ボルガン市の中でも小さな区の中で行われたが、とても上手く機能したので、現在フェーズ 2 の段階に入り、ボルガン区全体に広げようという動きが始まっている。JICA は、ヘルスワーカー個人の活動に対する報酬という形では一銭も支払わない。それよりも JICA は、ヘルスワーカーの育成や組織化に必要なものに対してのみ出資を行っている。なぜなら、「無給」でなければ、将来自立発展が見込めなくなるからだ。

初めは、ヘルスワーカーになりたいとい

う人はそんなにいなかったようだが、だんだんなりたいたいという人が増え始めてきている。現在はボルガン市の中の3地域で完全に組織化がされており、ボルガン市全域で組織化を行うことが目標となっている。余談にはなるが、この取り組みをするにあたり、「モンゴル版母子手帳の導入」ということを行った。そして、「赤ちゃんとお母さんが同じ手帳で管理することができる」という素晴らしさがモンゴルの保健省に認められ、2010年に全国展開が行われたようだ。母子手帳となると、モンゴル人は貧困が40%にもなるというのに、皆文字を読むことができるのかと疑問を抱く人もいるであろうが、社会主義時代の教育の影響もあって、モンゴルの識字率は99%と非常に高いものになっており、ほとんどの人が母子手帳を上手く活用することができているので、そのあたりは全く心配する必要がない。

III. 質問応答

Q: ボランティアヘルスワーカーは何人ぐらいいらっしゃるのか?

A: フェーズ1の段階で約100人おり、ボランティアは職業としては成り立たないので、女性が圧倒的に多いようである。

Q: ボランティアヘルスワーカーになるにあたり、資格は必要なのか?

A: 特に必要なし。しかし、ボランティアをするにあたり、知識は必要なので、数日間の研修や保健省が行うセミナーを受ける必要がある。

Q: JICA モンゴルの事業はこれからどのように変わっていくのか?

A: これから、無償で橋や学校をつくるなどの無償資金協力は減り、もしくは卒業し、借款事業を増やしていきたいという考えを持っている。借款事業とは、低金利で長期にわたり、開発のための資金を貸すことであり、そのお金は必ず返さなければならないが、資金調達が困難な国に対しては、低利で長期的な貸し出しなのでとても便利なものとなっている。

(文責: 西元有希)

南さんによる講義

この場では、主にモンゴルのごみ問題と教育について講義していただいた。講義は質疑応答形式で進められたため、実際の講義の流れに沿って記述する。

1. モンゴルのごみ問題

Q1.モンゴル人のごみに対する意識はどのようなものなのか？

A1.ごみに対する関心はあまりない。そもそもモンゴル人の生活は、遊牧生活が一般的であったため生活で出るごみはほとんどなかった。生活の中で出るごみといえば、獣の皮や骨が当てはまる。こういった物質は全て土に還るため、環境問題に影響をもたらすことはなかった。

また、社会主義時代のモンゴルのごみ収集は、完全に行政によるものであった。そのため、ごみをある一定の場所にまとめるという習慣は文化的にないという。しかし、近年食品の輸入が進んだことによって、ビニール袋や缶、ペットボトルのような土に還らない物質が増加した。このように、モンゴル人を取り巻く環境の変化とモンゴル人の習慣、この差によって生じているものがごみ問題だという。

Q2.ごみ問題に関する教育は行われているのか？

A2.家庭と学校、ともに行われていない。そのため「自分の街を自分の手できれいにしよう」というコミュニティ意識を持っていない。このような意識を持たせるためには、教育する機会が必要となる。しかし、このような意識が文化的にないため、教育する人がいないのが現状だという。

2. モンゴルの教育について

Q3.JICA と政府が取り組んでいる教育改革について教えてください。

A3.モンゴルの教育改革は、およそ 10 年前から行われている。その第一段階は「詰め込み型」の教育方針を変えるということにある。詰め込み型＝暗記教育であるため、子どもに考える力が身に付かないことが課題とされていた。そこで、学校の教育方針を変えるために、教師に対するカリキュラムが作成された。第二段階は、そのカリキュラムに基づいて、教師を指導することであるという。現在はこの段階に当たる。

(文責：淋翔太郎)

都市環境担当者による講義

I. ウランバートル市の都市整備

ウランバートル市の都市整備を理解するうえで押さえておかなければならない背景は2つある。1つ目の背景は、民主化によって当初40万人の都市だったウランバートル市に、人口集中したことである。今や、ウランバートル市は経済、文化、政治の中心になっており、仕事のほとんどがウランバートル市に集まっているという現状になっている。2つ目の背景は、2003年に行われた土地の私有化である。2003年以前は1世帯あたり、700平米の土地が与えられていたが、2003年以降1人あたりに700平米の土地が与えられるようになった。こういった要因から、ウランバートル市周辺への人口集中が続き、都市問題や社会問題が深刻化している。そういった背景から、JICAは都市整備を行う対象として、モンゴル国のGDPの半分を担っているウランバートル市を選んだ。現在、経済開発の推進、生活環境の改善、生活環境改善を図るためのutilityの整備(水・電気)、環境分野の支援、私有地をどのようにきちんと整備していくかという法整備や手法が整っていないので、制度整備の支援という4つの柱を中心に事業を進めている。将来的には、ウランバートル市をコンパクトシティにする予定だそう。コンパクトシティとは、2007～2009にJICAが行ったマスタープラン調査で考えられた都市形態である。そして先ほど述べた4つの柱を中心とした事業もマスタープランを主軸として進められている。マスタープラン調査によると、人口抑制のために、これから地方開発を進めても、ウ

ランバートル市は、将来的に180万人が住む都市にならざるをえないとされており、JICAではそれに向けた都市基盤の整備を行っていかようとなっている。

また、モンゴルの一番西の地区は、外から入ってくる人が一番住み着きやすいからという理由で人口の増加が著しい地域となっている。その地域で現在JICAは、学校教育をするための学校の整備、廃棄物の支援、ゲル地区改善計画などの支援を行っている。ゲル地区改善計画とは、コミュニティ無償開発をUN habitatと連携して、コミュニティの意向を踏まえた都市の整備を行うというものである。ターゲットを5地区決め、その地区でコミュニティーセンターの整備や、道路・歩道・街頭などコミュニティの住民が望むインフラの整備を行うという計画内容になっている。さらに、105番学校に文化ホール(集会所)を作ったり、幼稚園の拡張も行ったりしているそうだ。

II. ウランバートル市の都市整備に対するJICAの今後の援助方針

経済開発分野では、交通分野、公共交通支援を実施するための調査を進めており、生活分野では水の供給、無償事業の実施を想定した調査を行っているそうだ。また、環境分野では、ゲル地区の改善はウランバートル市の都市整備を行ううえでかかせない視点であるので、今後も継続して改善を行っていくと仰っていた。また、JICAは、2010年から防災分野への支援も始めた。近年、モンゴルでは無感地震が増えており、いつ大きな地震が来てもおかしくない状況だそう。しかし、モンゴルではここ100年ほど地震が発生していないので、国民の

防災に対する意識はとても低いという。また、都心部は老朽したビルが立ち並んでおり、もし地震が起これば、被害は甚大なものになると言われている。日本は地震という分野に強いので、技術協力を今後行っていく予定であるそうだ。その技術協力を行うために、JICA はまず、どのようなリスクがあるのかをきちんと把握し、どのような防災計画を作るかということや、モンゴル人の防災意識をどう高めていくかといった計画を立てているところであるという。防災の整備は都市基盤の整備にもなり、良い支援になるのではないだろうか。

III. 質疑応答

Q:現在のモンゴルのごみの処理方法はどのようなものなのか？

A:以前は、ごみを山積みしておくという処理方法であったが、現在はごみを捨てて土を被せるという衛生埋め立てを行っている。

Q:家庭ごみが街で山積みになっているが、行政は何か対応をとっていないのか？

A:その山積みになっている場所は、ごみ

捨て場なのではなく、住民たちが勝手にごみを集めているだけである。行政も対応しなければならないが、なかなか追いついていないというのが現状である。

Q:モンゴルに交通ルールは存在するの
か？

A:ルールは一応あるが、あまり守られていない。割り込みが多く、モラルが足りていないドライバーが多い。

Q:渋滞を減らすための取り組みは行っ
ているのか？

A:まず、道路が全く足りていない。なので、引き続き道路整備は行っていく必要がある。インターチェンジや交差点部分の改良は特に必要であると考えている。あとは、公共交通を基盤とした交通体制も整えていかなければならないと思っている。その整備のための調査も近々行われる予定である。

(文責：西元有希)

3-7: 58 番学校

場所：58 番学校

日時：2011 年 9 月 2 日、5 日

58 番学校について

58 番学校は、1974 年にダンバダルジャの南の境界近くに設立された、ダンバダルジャのゲル地区に暮らす子どもたちが多く通う小中高一貫校である。授業は午前と午後の 2 部制で実施され、現在約 2080 人の子どもたちが学んでいる。1 年生から 11 年生（日本の小学校 1 年生～高校 3 年生にあたる）まで各学年、約 5 クラスずつあり、合計 56 クラスある。また、一クラス 37 人編成で、87 人の職員が勤務している。また、58 番学校の新校舎建設に、日本が無償資金協力の初等教育施設整備計画で支援を行っている（在モンゴル日本国大使館 2006）。



↑ダンバダルジャにある 58 番学校校舎

58 番学校とのつながり

上野研究室では、2007 年度研修で 58 番

学校を訪れ、モンゴルの教育環境についての調査を行ったのが初めてである。以後、2009 年では GIS マップ制作をツールとしたコミュニティ調査、昨年 2010 年は Zorig Foundation と連携し CBYL プログラムを立ち上げた。

学校をフィールドにする理由

モンゴルの問題を解決する上で、私たちはコミュニティ形成からのアプローチ・政策を多く行ってきた。現地に既存している問題、例えばごみ問題といったものは、コミュニティの欠如、近年の都市化や国民のライフスタイルの変化と大きく関係している。そこで、学校というフィールドの中でコミュニティ形成を通して、将来を担う子どもたちを対象に問題解決を図ることが効果的ではないかと考えた。

今年の活動

今年 2011 年は、東日本大震災を受け、モンゴルからの義援金に対する感謝を伝え、防災に関するプレゼンテーションを実施した。さらに、昨年 2010 年度に実施されたクリーンアッププロジェクトでの反省を生かし、ゴミ問題に対するプレゼンテーション、クリーンアップを今年度も引き続き実施した。

（文責：中西 美帆）

3-8：エンフチロン大学 近彩先生との交流

場所：エレガンスホテル

日時：2011年9月5日



上野教授(左)と近彩先生(右)

(出典：上野研究室)

近彩先生(70)はエンフチロン大学の日本語講師をされており、当ゼミの上野教授とは交友関係がある方である。雑誌『コンパインナー』の編集長も務めており、モンゴルの近況を日本語でまとめ、発行している。

モンゴル研修6日目、現地時刻の21:00から私たちが宿泊しているエレガンスホテルにて、近先生と通訳の方々(近先生の生徒の方々)を招き、ミーティングを実施した。このミーティングでは、翌日の小学校でのプレゼンテーションに向けて、日本語からモンゴル語に翻訳するお手伝いをしていたほか、2日後に控えたエンフチロン大学における学生の方々との交流会の最終確認を行う時間とした。

近先生からモンゴルの生活様式や社会情勢について貴重なお話を聞くことができた。

以下、箇条書きでまとめていきたいと思う。

国民性

- ・親日国という意識が高い(民主化の際に手を差し伸べたのが日本だった)
- ・流行に敏感
- ・モンゴルの全人口=大阪の人口(人口密度が低いことがわかる)
- ・平均寿命は64歳。近年少しずつではあるが、高齢化が進行している(数年前までは60歳であった)
- ・遊牧民族のため、口伝えが中心(そのために耳が発達しており、語学力が優れている。)
- ・モンゴル人に合う家屋はやはりゲル(利便性を求めて高層マンションに住んでいる人も多いが、家族を近い存在でいられるゲルを好む人が多い)

都市環境

- ・ウランバートル市民は特に別荘を所持(夏季休暇は別荘のある自然の中で、日常生活は交通に便利な都市部で暮らす)
- ・ウランバートル市内には数十年後に地下鉄が通る都市計画も(交通渋滞の緩和へつながる)
- ・近々、高架橋が完成予定
- ・建造物の耐震性が低い
- ・降水量がほとんどないため、排水溝自体が少ない

その他

- ・内陸国のため、特にロシアの影響を受けて、ファッションなどヨーロッパナイズされているところも見受けられる
- ・自慢の空(空気が澄んでいるため、空高く見上げなくても、星を見ることができる)
- ・紫外線は強いため、対策をしなければならぬ

家族との時間を大切にするモンゴル人にとって、特に夏季休暇の過ごし方は一番の「贅沢」に値するのではないかとおっしゃっていた。家族の絆を大切にし、自然が豊富である一方で、耐震性や交通渋滞問題などの問題点も指摘されている。私たちは 2 つの目を持っているからこそ、モンゴルの良い面も悪い面も感じてほしいとのお話だった。

(文責：志熊 沙紀)



集合写真 (出典：上野研究室)

3-9：ゴミ問題プレゼンテーション、紙芝居

場所：58番学校、エンフチロン大学

日時：2011年9月6日

1. 58番学校でのごみ問題啓発活動

ここでは、58番学校でのごみ問題の啓発活動について報告する。

我々がモンゴルの学生たちにモンゴルの発展のために何か貢献できることがないかと模索した際、我々の先輩方の活動を参考にした結果、モンゴル人はその風土から『公共性の欠如』が日本や他の先進国に比べ目立つことが分かった。そしてその分野において日本で教育を受けてきた我々なら少しでもモンゴルの発展に役立つと思い、不特定多数の人が生活する共同スペースについて考えてもらえるような機会を設けたいと思ったのが発端である。手段として浮かんだのが、モンゴルにおいて深刻になっているごみ問題である。先輩方の報告によるとモンゴルの町ではごみが町にあふれているということである。

それと同時に学生という多感な時期に社会において考えるきっかけを得るのはこの国でも共通してあると思われるから、ごみ問題に関し取り扱うことに意義があると、行動を実施することとした。

内容としては昨年ゴミを一緒に拾う活動を実施し好評だったということから本年度もごみ問題の啓発運動講座とゴミ拾いを行うこととした。ここでは講座であるプレゼンテーションと紙芝居の二つについて報告す。

2. プレゼンテーション・紙芝居

2-1. 概要

学生になぜゴミを捨てることが良くないことだと考えてもらう手段として、我々が関わる対象学年が一番年少のクラスで小学校4年生に相当する学年ということで彼らに最終段階として『ゴミはごみ箱に捨てる』ことを行動して欲しかったので、プレゼンテーションでは自己に直接影響する不利益を主に知ってもらいゴミをきちんと捨てることのアクションに結び付けてもらうことを考えて作成した。

章分けをすると

- ・日本の紹介
- ・紙芝居
- ・なぜゴミを捨ててはいけないか
- ・ごみ問題に関するクイズ

の4つに分けてプレゼンテーションを行う運びとなった。以下それぞれの説明である。

2-2. 日本の紹介

ここでは、日本について知ってもらうことが必要だと考え土地の環境や同じ立場の学生がどのような生活をしているかを説明することとした。

環境においてモンゴルと日本の大きな差異は、『気温』だろう。モンゴルに植物がないというわけではないが、気温差が80度もある厳しい環境の中日本のように四季折々の植物が育つことが難しいので季節による自然の説明を行った。反応として学生の中か

ら『サクラ!』という言葉が口をついて出てくるということから日本の木が認知されていることに驚いた。

また、モンゴルは学校の数や教師の数が生徒の数に比べ少ないためか、授業を半分に分けている学校が多い。日本の小中学生が朝から夕方まで学習する姿をタイムスケジュールを交えて説明した。反応は、説明の時間が短かったためかあまりわからなかった。

2-3. 紙芝居

小学生の時期に物事を理解してもらうためには、口で理由を説明するよりも何か物語にして伝えるほうが有効であると考えた。そのため紙芝居という、人物が登場し物語が進む方法でゴミの問題を考えてもらうこととした。あらすじとして、主人公である小学生の男の子がゴミをポイ捨てし、そのゴミが土壌を汚染し食物連鎖のサイクルからその汚染された土壌で育った草を食べて育った羊を食べて主人公が病気にかかってしまうという内容である。人物の設定に関し、より親近感をもって接してもらえるように主人公の名前は、モンゴルでポピュラーな名前である【ボルト】と名付け、食料も伝統食である餃子と豚まんによく似た【ボーズ】を使用した。

捨てたゴミ(ここではペットボトル)が風に乗って草原まで運ばれるという設定は、モンゴルのナランギンエンゲルごみ処理場に積み上げられたゴミが実際に風で舞い上がり周辺に悪影響をもたらしているという事実をもとに構成した。

学生は終始静かに楽しんで聞いていた印象であった。最後はバッドエンドで終わって

しまったため不安な気持ちになってしまったのかもしれない。

2-4. なぜゴミを捨ててはいけないか

ここで先に説明した紙芝居を深く掘り下げ、なぜゴミを捨てるのが悪いことなのかを考えてもらった。その主な理由として提示したのが【病気】【怪我】【悪臭】【火事】である。

実際にごみがどのようにして運ばれているのか、付近の実際の処理方法であるナランギンエンゲルへ向かうごみ収集車を例に説明し、先に述べたそこで積みあげられたゴミが風で町に戻っている現状を説明した。しかしこの理由では解決方法が学生側から見出すことができないため、それぞれのモラルに訴えかけ、身近なことから変えていく努力をしてもらうためポイ捨てを行わないようにということを説明した。その場で手を挙げてもらったところほぼすべての学生がポイ捨ての経験があるとのことであり嬉しそうにあげる姿から悪いという自覚も希薄であると感じられた。

2-5. ごみ問題に関するクイズ

ここで、楽しくごみ問題を解決する手段を知ってもらうために世界のごみ問題の取り組み方をクイズ形式で知ってもらった。主な内容は【日本のごみ回収率】【リサイクル方法】【デポジット】【ごみを捨ててもらおうアイデア】である。

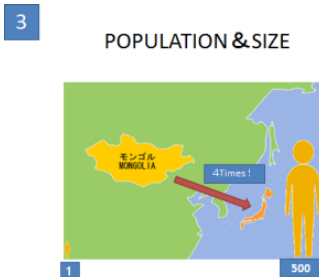
リサイクルを行うことでプラスチックが衣類に代わることに驚き、興味を示していた。また、西洋のごみ箱でゴミを捨てると、ゴミの落ちる音がするごみ箱があるのだが、学生側の反応として『ゴミ箱が踊りだす』

『中で燃える』など様々なユニークなアイデアが飛び交い、積極的にゴミ問題に関心を示してくれたように思う。

生がおらず本当に真剣に関心をよせてもらえているのだと感じた。ゴミ問題を考えるにあたり、日本の教育や自分自身の行動を振り返る良いきっかけとなった。

2-5. まとめ

今回4年生、8,9年生(中学2,3年に相当) (文責：樋口 潤哉) に対しプレゼンテーションを行ったが どちらの学年も寝たり、騒いだりする学



[参考画像]



3-10：防災プレゼンテーション

場所：58 番学校、エンフチロン大学

日時：2011 年 9 月 6 日

目的：「防災意識」を持ってもらう。
 ⇒東日本大震災を経験した日本人として、
 今後モンゴルでも起こりうる地震の備えを
 してほしい。

BIG EARTHQUAKES IN MONGOLIA			
Earthquake	Tsetserleg	Bulnain nuruu	Gobi-altai
Date	7/9/1905	7/23/1905	12/4/1957
Magnitude	8.1	8.3	8.1
Fault	120KM	370KM	270KM

①モンゴルにおける過去の地震発生時、マ
 グニチュード、震源の位置を調べ、モンゴ
 ルにも地震が起こりうることを実証した。



②断層の位置を提示。

POSSIBILITY OF EARTHQUAKE IN MONGOLIA

- An earthquake in Mongolia may cause fires in urban areas.
- In fact, a large fire occurred after the earthquake in Hyogo prefecture, Japan on January 17, 1995.

③もしモンゴルで地震が起こったら、地震
 の被害だけでなく、都市部では火災の被害
 を受けることを阪神淡路大震災を例にあげ
 て説明した。

PREPARATION FOR EARTHQUAKE

- Training to minimize damage of earthquakes

Do you know about disaster prevention?

④「防災」という言葉を、まず知っている
 か、問いかけた。

EXAMPLE OF DISASTER PREVENTION IN KOBE-CITY, JAPAN (1)

- Water tanks for putting out fire
- Map showing the placement of water tanks
- 39 spots in Nagata-ward

⑤日本で行われている防災例①（神戸市）
 火災が発生した際に、消火用の水のタンク
 がマンホールの中に用意してある。

- どこに水のタンクがあるのか、という
 地図をつくる
- 長田地区の 39 の場所に水のタンクは設
 置させている

WATER TANK(2)


- The tanks can store 100 tons of water
- Citizens learning to use water tank to extinguish fire

⑥このタンクは、100 トンもの水を貯めて
 おける。地域住民がそれらの使い方を定期
 的に練習している。

USEFUL WAYS TO REDUCE DAMAGE FROM EARTHQUAKES (1)

For example...


- Training for evacuation
- Getting emergency information regularly



- ⑦地震の被害を少なくする方法①
- ・ 学校で定期的に避難訓練が行われる
 - ・ 緊急時にいち早く情報を得られる

USEFUL WAYS TO REDUCE DAMAGE FROM EARTHQUAKES (2)

- Don't put heavy baggage on furniture
- Fix furniture to the wall



- ⑧地震の被害を少なくする方法②
- ・ 重い家具などが倒れないようにつっぱり棒を事前に設置しておく
 - ・ 耐震補強

USEFUL WAYS TO REDUCE DAMAGE FROM EARTHQUAKES (3)

- Identifying the place for evacuation in advance
- To prepare household goods



- ⑨地震の被害を少なくする方法③
- ・ すぐ持ち出せる場所に、緊急用の鞆を置いておく
 - ・ 防災グッズを用意しておく

(文責：芝田真子)

3-11：クリーンアッププロジェクト、交流会

場所：58番学校

日時：2011年9月6日

【クリーンアッププロジェクト】

<目的>

同日の午前中に行われたプレゼンテーションによって、モンゴルのゴミ問題の現状と解決策について理解を深めてもらった。その上で、解決策の一つであるゴミ拾い活動を実践し、ゴミをポイ捨てしないことや、落ちていたゴミを拾う習慣を身につけてもらう。

<対象>

8年生、9年生（日本では、中学2・3年生にあたる）

<活動内容>

昨年と同様に、58番学校の前にある河川敷のクリーンアップをクリーンアップの場とした。ゼミ生が、生徒一人一人に目が届くように、小さな区画を分担して行った。ゴミを拾い、専用の袋に詰め、それを学校内にあるゴミ置き場へ運ぶ作業を繰り返した。時間は1時間ほどの短い間であったが、多くのゴミを拾うことができた。

<準備物>

軍手 100人分

ゴミ袋

帽子（ゼミ生用）

<子どもたちの様子>

プレゼンテーション終了後、すぐに移動をしクリーンアップを始めたことにより、8・9年生のほぼ全員が参加した。昨年も、クリーンアッププロジェクトを実施していたこともあり、子どもたち自らがトンゴや桑などの清掃道具を自宅から持ってきていた。また、学校で揃えた、ゴミ拾い用の上着を着用している生徒も何人かおり、学校側もクリーンアップ活動を定期的に行っていることがうかがえた。学校内のゴミ置き場の位置を一人一人が把握していて、集めたゴミをゴミ置き場へ運ぶという流れを、ゼミ生の指導なしに行うことができていた。しかし、分別の概念がなく、ビニール袋もビンも全て同じ袋に集めてしまう生徒が多かった。全体を通して、子どもたちは積極的に参加し、ゴミを拾っていた。





<成果と課題>

プレゼンテーションでも、クリーンアッププロジェクトでも、分別収集やリサイクルについて紹介した。しかし、現在のモンゴルではほとんど分別やリサイクルは行われておらず、クリーンアップ活動の中でも分別を指導し、実践することができなかった。

次にクリーンアップを通して感じたこと

は、モンゴル人のコミュニティ意識についてだ。学校の教室内をみると、ゴミ一つ落ちておらず大変きれいである。しかし、学校の敷地を一步でると、ゴミが散乱している状態であった。これは、住宅街においても同様で、家の敷地内はきっちり清掃させているのに対して、ゴミだらけであった。モンゴルにおけるコミュニティ意識の低さが招くものであり、まずは意識の改革から始める必要があると感じた。

そして、今回のようなクリーンアップ活動を定期的に行われるべきものである。そうすることによって、「クリーンアップ」という意識なしに、ゴミをポイ捨てしないことや、落ちているゴミは拾うという行動が習慣化されるだろう。

【交流会】

場所：58番学校

日付：2010年9月6日

<活動内容>

クリーンアッププロジェクトが行われた後に、学校の体育館を借りて交流会を行った。時間は一時間ほどで、初めにお菓子やジュースを配った。ゼミ生が子供たちの中に入り、お互いの文化を知るために行った。

<対象>

8年生、9年生（日本では、中学2・3年生にあたる）

<準備物>

飴

ジュース（紙パック）

寄付用ボール 9 個（サッカーボール、バスケットボール、バレーボール）

<子供たちの様子>

子供たちは大変元気が良く、言葉の通じない日本人に対しても人懐っこく、お互いに身振り手振りで積極的に交流することができた。ゼミ生はそれぞれ違うグループに入ったが、モンゴルの伝統的な遊びをしたり、日本の伝統的な遊びを教えたり、ジュースを飲みながら話をしたり様々であった。また、帰り際にはきちんとジュースの空きパックをゴミ箱へ捨てていた。



<反省点>

前もって、ボールを使うことの出来る範囲などを決めていなかったため、他の子供たちに当たりそうになったり、危険であった。また、想像以上に参加した人数が多く元気だったため、メガホンや笛を用意しておく必要があった。

（文責：中村絵夢）

3-12：エンフチロン大学訪問

場所：エンフチロン大学

日時：2011年9月6日



(出典：上野研究室)

モンゴルの滞在最終日の8日目、10:00からエンフチロン大学を訪問し、学生同士の交流会を実施した。まず案内されたのは、学生がいつも授業等で使用している教室である。



(出典：上野研究室)

私たちの大学のようなホワイトボードではなく、高校で使用していたような黒板で授業が行われていた。写真の右側に少し写っているように、イラストとモンゴル語・日本語が書かれている言葉表が貼られおり、

個人的な感想になるが、日本人として親近感がわく空間であった。

近先生(第11章参照)のお話でもあったように、学生の方々は皆おしゃれで、日本の寒さに比べるとモンゴルの冬の寒さは厳しいにもかかわらず、薄着の学生が多かった。

会場の準備が整い、案内された先は体育館のような場所で、私たちはプレゼンテーションと紙芝居劇を行った。災害への危機感を持っていただき、防災対策に力を入れてほしい、モンゴルの環境問題を知ってほしい、このような思いで臨んでいた。実際に、こちらの問いかけにも反応があり、少し難しい内容だったにもかかわらず、休憩をはさみながらも、順調に進んだ。上野教授・近先生双方からの評価をいただき、そのまま交流会へと移った。



(出典：上野研究室)

交流会では学生の方々が用意してくれたコーヒーやお菓子を食べながら、学生同士のたわいもない会話を楽しむひとときとな

った。男女問わず話をする事ができ、初めは緊張しながらも貴重な体験となった。ここでもやはり親日感情を持ってきている印象が強かった。日本語について学んでいるからかもしれないがほとんどの学生が、たとえ先になってしまったとしても金銭面に問題なければ、日本に行ってみたいと答えた。



(出典：上野研究室)

楽しいひとときは一瞬にして過ぎ去っていった。時間となり、大学を後にする際には、見送りに来てくれる方が多く、個々に連絡先を交換する光景が見受けられた。これは私たちにとってのスローガン「モンゴルと日本の架橋になる」ことだと感じた。

(文責：志熊 沙紀)

4. ホームステイ体験

場所：各ホームステイ先

日時：2011年9月7日

目的

ホームステイすることによって、現地の人々の生活状況や文化、ものの考え方をコミュニケーションを通して知り、理解すること。また、文献等を読むだけでは分からないことを知る、あるいは知っていることであっても、実際に体験することによってさらに理解を深めるということにも、ホームステイの意義があるだろう。

ホームステイまでの流れ

私たちは9月7日の夕方から翌9月8日の朝にかけて、モンゴルの家庭にホームステイをした。昨年もホームステイ先の家族の手配をしていただいたジャブザンジャルガルさん（ジャブザさん）に、今年もホームステイ先の手配をしていただいた。ホームステイ当日の数日前に、彼女と、上野先生、上野ゼミ生で上野先生のホテルの部屋で、事前の打ち合わせをした。その際にホームステイ先の家族の名前と、各家庭に付いていただく通訳さんの名前を教えていただいた。

予定では、7日16時、ホテルのロビーにてジャブザさん、通訳さん、ゼミ生が集合

し、ホテルからはみんなでバスに乗って、ホームステイ先に行くこととなっていた。しかし予定通りに事は進まなかった。というのも、時間になっても通訳さんが全員揃わなかったのである。また、驚いたことに、急遽ジャブザさんが出産されたのである。そのため彼女は来られず、代わりの方が来てくれることとなったのだが、その方がなかなか現れない。結局みんなが揃い、ホテルを出発したのは、予定の時間よりも1時間以上後になってからのことであった。ホームステイ先までバスに揺られながら、都心のウランバートルを離れ、ゲル地区を抜け、ガタガタ道を通っていった。そして、到着したところにはあたりも少し薄暗くなりかけ、肌寒さも感じられた。

ホームステイ先の概況

私たちがホームステイした家庭は、都心のウランバートル、そこを取り囲むゲル地区から少し離れた場所で、程よくモンゴルの広大な自然が味わえる、長閑なところであった。そこでは、ゲル生活のところもあれば、家を持っている家庭もあり、様々であった。各家庭で、自分の土地を決め、柵で囲い、その中でゲルや家を建てたり、番犬を飼ったりして生活を営んでいた。ゲル地区でも自分の土地を柵で囲っていたが、ゲル地区のように無秩序に混み入った感じはしなかった。また、電気も通っていたのだが、時々停電することもあった。各家庭にお風呂はなく、トイレも穴を掘って作ったものであった。モンゴルの家庭にホー

ムステイして、このような生活水準の差を体験したと同時に、モンゴル人の家族への愛やその絆の深さを感じることができた。それは、ホームステイ先で各自実施した、アンケートの結果にも見て取ることができ

る。しかし何よりも、モンゴル人の家族の絆の深さは、ホームステイを通して私たち学生は直に肌で感じる事が出来ただろう。

(文責：綿谷梨花)

1. 樋口・沈の家庭

〈家庭構成〉

父親：ミンゼッさん

かなり金持ちの家

母親：アッセンドラさん

興味：テニス、山登り

夢：娘が立派に育つこと、牛のビジネス事業をもっとうまくいかせ拡大させたい

長女(双子・11年生)：ナムエルテル(ナマァ)さん

興味：バスケ、テニス、スイミング

夢：日本に行くことだった(だが今回の地震でやめた

二女(双子・11年生)：ナンディエルデノさん

興味：バスケ

夢：卒業してから大学でお医者さんになる

末っ子(幼稚園の年齢にあたるので4歳?)：???さん

興味：絵本を読む

家畜の牛：6匹位

番犬：1匹



家族全員写真



犬小屋



私たちと主人たちの写真

通訳：ダミーさん

28 歳既婚子供あり 妻とは 23 歳で結婚。建築の仕事をしていて日本語を仕事の関係で必要だったため日本の首都で 3 年間留学。通訳の仕事は電話で頼まれたので今回したが、普段はしていない。



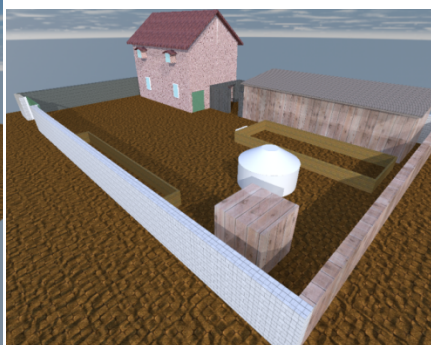
ダミーさんとの写真

〈住環境〉

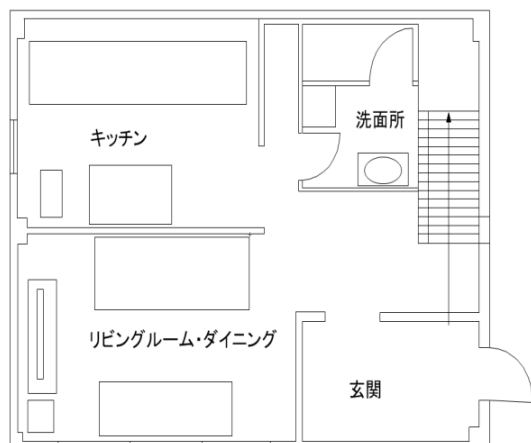
かなり広い敷地の中で、コンクリート造の一軒家ひとつ、木造の牛を飼う部屋とゲルひとつ、犬小屋ひとつ建てている。敷地はコンクリートブロックの壁やウッドフェンスで囲まれていた。ゲル地区で住んでいるなのに、牛の商売をしているので、金持ちとなっている。敷地も、部屋も、結構広いイメージを与えられた。一階はダイニングルームやキッチン、洗面所（水があまり出ない）、トイレやバスルームがあった。二階は二つの寝室、娘三人はひとつの部屋、壁で、いろいろな数学方程式、もしくは落書きを書いている。も一つの寝室は両親の寝室で、入ったことがなかった。二階で、大きなバルコニーがあった。



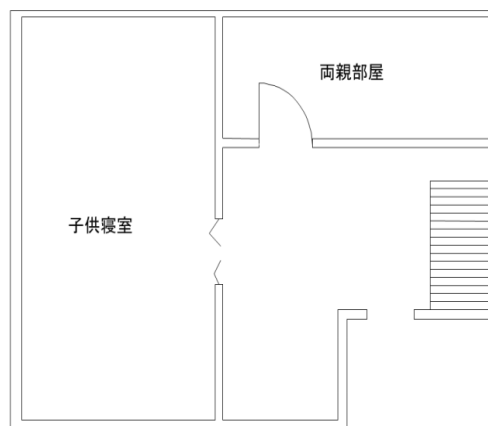
敷地状況 1



敷地状況 2



1 F 平面図



2 F 平面図

〈移動手段〉

BENZ の車

〈食事〉

夕食前に、トマト、ハム、卵、パン、キュウリ、モンゴル茶など軽食を食べさせてもらった。その後の夕食の際に、ボーズ、キュウリ、紅茶など食べさせてもらった。次の日の朝ごはんはモンゴル茶の中に、ボーズを入れたものを食べた。



晩ご飯：ボーズ、紅茶



朝ご飯：ボーズをいれたミルク

〈感想〉

①男女の地位

モンゴルで、結婚後、女性の名前を変えないことを明らかにし、家庭の中で、男女は同じ地位を持っているのではないかと感じた。

男女は家庭を支える二本の柱であり、男女は家庭生活の中で、同じ役割を分担していることは極めて重要なことだ。たとえば、男は外で働き、経済面から家庭生活を支え、女は家庭内で子供の教育や家事をやる。そんな形で家庭メンバーの絆を深めることは可能だ。もちろん、現在の日本のような、男女とも外で働くケースが多くなり、経済面から考えると、夫婦二人とも家を支えているように見えるが、しかし、家庭内にいる時間が短くなり、

家族の間の絆も薄くなるケースも多く、子どもを育てにくくなり、離婚率も高くなる。

②自然資源の活用

モンゴルで、冬や夏の温度差は70℃くらいあり、牛を飼う部屋は木造の部屋ですが、冷暖房などを入れず、牛の生存はかなり問題になるはず。実際に、部屋の中に入り、木造の壁の上に、牛の糞を使って、壁の上にくっ付けて、そういう行動による、部屋内部の温度差を控え、牛の健康を図れるようになる。

一部、貧しい遊牧民たちはストーブの代わりに、牛の糞を燃やすことによる、冬場で暖房の役割を立つ、結構エコなやり方で、自然の中で生まれ、育てたモンゴルの人々は自然の恵みを生かし、自然にやさしい生活の知恵を練り出したことを感じた、日本人や中国人などはそれを「借りる」べきだと思う。



写真：牛の糞でくっつける牛を飼う部屋の壁

③モンゴル人独特なコミュニティ

ホームステイ先で、テレルジ国立公園以外で、二回目の乗馬をした（無料）、アッセンドラさんに誘われ、乗馬をもう一回体験した、遊牧民のゲルまで連れて行く、いろいろ話をして、馬乳酒を与えられ、お腹によくない（下痢し、モンゴル人は夏場に馬乳酒でお腹をきれいにする）なので断ったが、その時、通訳



写真：近所のお婆さん

さんと話しながら、実際に、そのゲルの持ち主は毎年の夏場にここへ戻ってき、アッセンドラさんも友たちのような関係であり、だからこそ、無料で乗馬させてもらった。

その後、遠くない所のゲルへ連れて行き、そのゲルで住んでいるおばあさんとおじいさんとたくさん話し合っ、肥料のようなものをそちへ運んで、一定の料金をもらうことにした。言葉は通じてなかったが、しかし感じたのはモンゴルで普通コミュニティはできてなかったと考えられたが、実際に、モンゴル人の生活の中で、あの違う種類のコミュニティは存在しているのではないかと感じた。

もう一点としては、晩ご飯をする時、車にのり、隣の部屋へ預けられた私たちの友だちのホームステイ先の家まで挨拶しに行くかどうか、アッセンドラさんに聞かれ、車に乗るのは主人さんに迷惑をかけるので断ったが、しかし実際にゲル地区で私たちがよく知っているようなコミュニティではなく隣人との間に、別な形のコミュニティは存在しているのではないかと感じた。

④問題意識

通訳さんのダミーさんは東京で三年くらい留学した。話し合いながら、ダミーさんはかなり自分の国の問題について気づいたわけ、もちろん三年の海外生活し、自分の国のいいところやよくないところははっきり知っている。ごみ問題やゲル地区の大気汚染問題、どういう問題の仕組みか、どういう風に解決するか、自分なりに見解をもっている。素晴らしかった。

しかし、ダミーさんは長い間に海外留学したが、たくさんの国民たちは海外に行ったことがなかったので、彼らの問題意識をどういう風に育つことは課題であると思う。

(文責：沈洋)

2. 淋・中西の家庭

〈基本事項〉

ホームステイ先…ゲル地区のビャンブさん宅

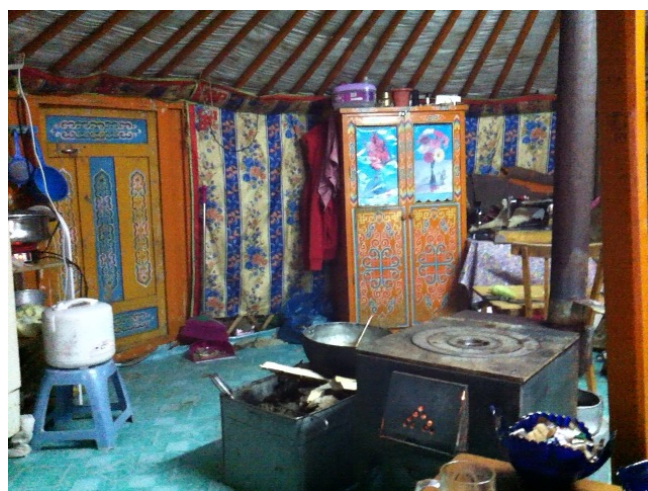
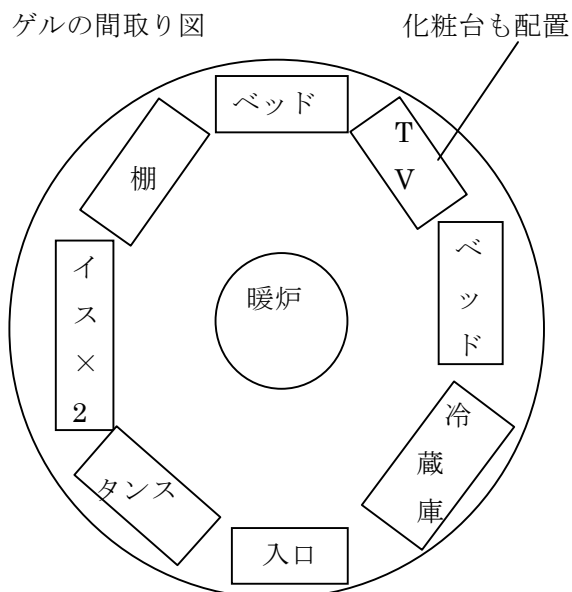
家族構成…父親・母親・娘（8年生）・息子（5年生）・番犬1匹

職業…靴づくり（自宅が作業場）

通訳者…バヤサさん（日本で6年間、漁師としてお仕事をしていたため日本語が堪能）

住居…ゲル（トイレは外にあり、地面を掘っただけのもの）

ゲルの間取り図



写真：室内（出典：上野研究室）

〈食卓を飾るモンゴル料理〉

チャンスン・マフ（骨付きの羊肉）

ツォイバン（肉と野菜を油脂で炒め、麺とともに蒸した料理）

ゴリルタイ・ショル（うどんのような食べ物）

その他、ピクルスやキムチ、白米まで用意してくれました。

（右の写真はゴリルタイ・ショル）



〈ホームステイを体験して感じたこと〉

ホームステイを経験して実感したことは家族・人との「絆」です。

私がホームステイさせていただいた家庭は、決して裕福とは言えない家庭でした。そのため「何か盗られるのではないか？」と本当に心配でした。しかし、そのような心配は一切無用でした。ビャンブさん宅は、私たちをととても温かく迎え入れてくれました。モンゴル相撲の競技服を着せてくれたり、馬頭琴を持たせてくれたりと最大限のおもてなしをしてくれました。

その中でも特に印象に残っている出来事があります。それは、夕食を用意してくれた時のことです。「みんなでご飯を食べましょう」私はお父さんに声をかけました。それに対して、お父さんは「先に食べていいよ、君たちはお客さんだ」「僕たちは余ったものを食べるから」と言い、黙々とミシンで靴を作り続けるのです。その言葉から、人に対する思いやりを強く感じました。私たちが食事をしている傍らで、家族は家業に励むなんて日本では考えられないようなことです。更に、お父さんが続けて言います。「家族全員で仕事をしている、みんなで協力して生活をしている」と。

私はこの言葉、そして姿勢に考えさせられました。本当の「絆」とはこういうことを言うのではないかと考えました。日本で生活している時は、こんなことを考えたことはありませんでした。ビャンプさんの家庭は、日本の生活と比べると不便です。水道やガスも通っていないような環境です。それでも、この家庭には人に対する「優しさ」や「愛情」で満ち溢れていました。日本で生活していると、「目に見えないものの大切さ」を忘れがちで生活してしまいます。しかし、このホームステイでは「見えないものの大切さ」を実感することができました。去年の漢字に選出された「絆」という1文字。日本では漠然と感じていましたが、改めてその言葉の意味を考えさせられた貴重な経験でした。



写真：家族と（出典：上野研究室）

（文責：淋翔太郎）

3. 綿谷・志熊の家庭

〈ビャンプさん一家〉

- ・祖母(今でも現役で働いてる)
- ・母・インヒエさん
- ・17歳の娘・シャガー
- ・20歳の息子
- ・叔父(仕事：ドイツ製の車関係、所有車はベンツ)
- ・叔父の奥さん(妊娠中)
- ・犬 4匹(1匹日本円で20万ほどはするそう…)



写真：ホームステイの家族と（出典：上野研究室）

〈タイムスケジュール〉

家到着→家族団らん→所有地内散策

19：00 娘・シャガーが学校から帰宅

20：00 馬乳酒を買いに行く

(家の近くを流れているトゥール川沿いを散歩)

20：30 帰宅・団らん

23：00 就寝

馬乳酒：馬乳を原料として作られた
モンゴル伝統のお酒。

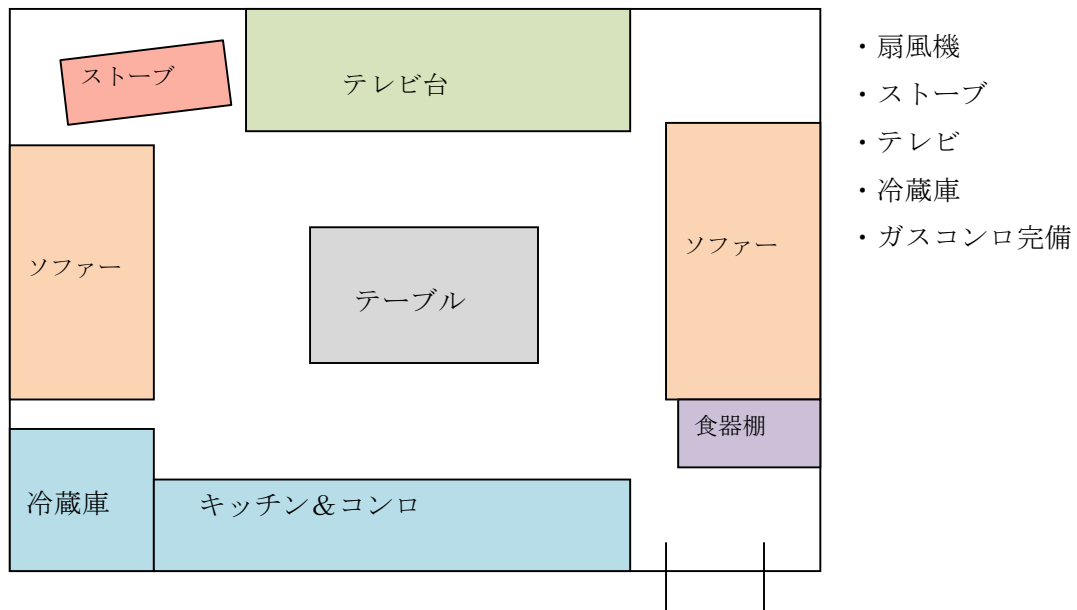
〈生活の様子〉

- ・夕方は特に停電が日常茶飯事。
(電気・テレビ・冷蔵庫などの電気が消える)
- ・娘：シャガーはよく家事の手伝いをしている
(食事の準備・後片付け等)
- ・夕食は家族が協力し合って作る



写真：夕食の準備風景（出典：上野研究室）

〈屋内配置図〉



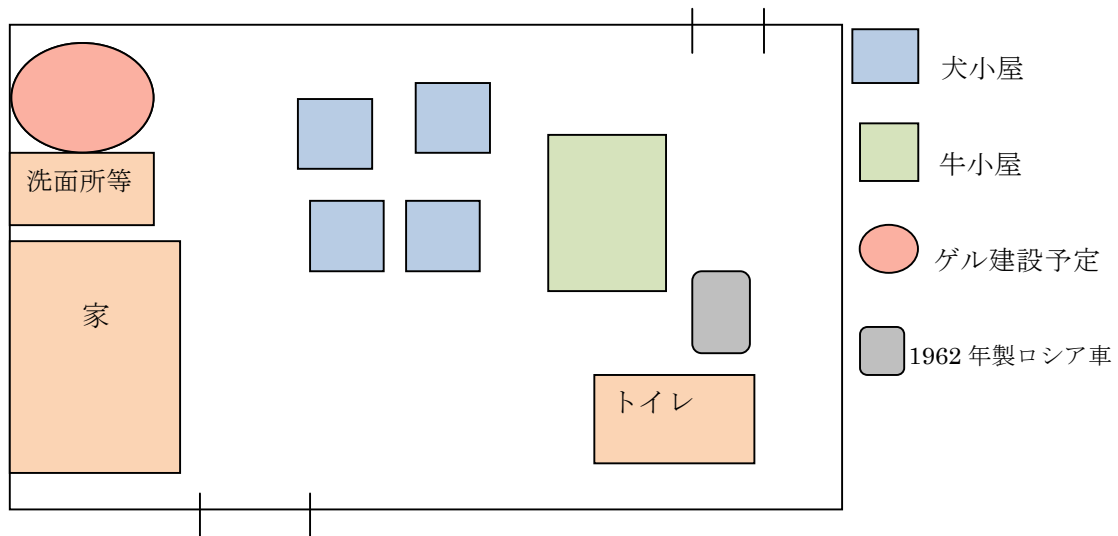
- ・就寝時はテーブルを部屋の端に寄せ、布団を敷く
- ・テレビ台後ろの壁一面に家族写真が貼られている
(中には大統領から表彰されている写真もあった)
- ・テレビは局数が多い
(日本の NHK ニュースや韓国ドラマの放送もある)

〈敷地内配置図〉



左:家 右:洗面スペース (出典: 上野研究室)

- ・日本では家の中に洗い場スペースが収まっているが、モンゴルでは別の建物の中に洗面所があるケースも。
- ・お風呂に入る習慣がないため、お風呂場はなかった



① ゲル建設予定地

家の敷地内にゲルを建設するための土台が組んであった。洗面所等が設置されている建物とつなげることで、ゲルとの行き来が可能になるように工夫されてあった。



(出典：上野研究室)

② トイレ

モンゴルの中でもゲル地区のトイレは、主に穴を掘ったところで用を足す様式が一般的である。トイレトペーパーも使う習慣がない。しかしビャンブさんのお宅は、穴を掘ってはいるが、その穴の上に簡易な洋式用器具が設置されていた。トイレトペーパーも完備され、比較的裕福な家庭だと思われる。



トイレの建物 (出典：上野研究室)



トイレ内 (出典：上野研究室)

③ 1962年製ロシア車

記念として家の敷地内に飾られていた。叔父の自家用車の車種はベンツで、通訳の方によるとモンゴルの方で、ベンツに乗っている人は裕福な方だとおっしゃっていた。



左：1962年製ロシア車 右：ベンツ（出典：上野研究室）



写真：通訳ソロンゴさんと

（出典：上野研究室）

〈まとめ〉

到着するや否や手厚く歓迎してくださり、食事のときは伝統的なモンゴル料理だけでなく、桃のジュースやポテトサラダも用意していただいた。積極的に話しかけてくださり、すぐに緊張もほぐれた。夕方にはみんなで散歩に行き、きれいな星を見ながら、モンゴル語を丁寧に教えていただくことができた。日本に行ったときは、連絡するから。と言ってください、家族の暖かさを感じることでできたホームステイだった。

（文責：志熊沙紀）

4. 中村・西元の家庭

<家族構成>

祖母：トゴーさん

孫：ブブちゃん（高校生）

同じ敷地内にゲルがもう一つあり、ブブちゃんの父親と小学生の娘が暮らしていた。

<住環境>

木の柵で囲まれた敷地内には、二つのゲルとトイレがあった。敷地は、日本の一般的な家庭と比べると広かったが、宿泊したゲルの中は大変狭い印象であった。ゲルの中は、折りたたみ式のベッド、ストーブ、洗面所、キッチン、たんす、食器棚、テレビや冷蔵庫などの電化製品があり、生活に必要なものは全て揃っていた。ベッドや食器棚などの家具は、伝統的な柄の模様で統一されており、見た目にもこだわりがあるように感じた。洗面台は、タンクに水を注ぎ、棒を上に押せば、水が出てくるしくみになっていて、顔を洗う時などは沸かしたお湯を入れていた。トイレは、ゲルの外に設置されていて土に深い穴を掘り簡単な便器を置いただけのものであり、もちろん臭いはひどかった。テレビも使われていたが、何度か電気が止まってテレビが消えていた。それでも、家族で海外ドラマを見たり、テレビゲームを楽しんだりして過ごしていた。



左：トイレ 右：洗面台（出典：上野研究室）

<食事>

ホームステイ先に到着した時に、モンゴルティーや家庭で作ったチーズ、固いクッキーのようなものやフルーツを出してくれた。夕食は、高校生のブブちゃんがボウズを作っていて、中村・西本もボウズ作りを体験させてもらえた。皮は、小麦粉に水を足して棒を使

って伸ばし、中身の肉は牛肉に味付けをして、それを包んで蒸すだけの簡単なものであったが、どこのレストランで食べるよりもおいしく感じられた。



写真：夕食準備風景（出典：上野研究室）

<家族の様子>

ゲルでは、二人ずつで生活していたが、食事の時には必ず家族全員が集まっていて、楽しく時間を過ごしていた。また、ホームステイ中に近所に住んでいる親戚や友達が何人も訪ねてきて一緒に食事をしたり、お喋りをしていた。これは、この日だけのことではなく毎日誰かが訪ねてくるそうだ。食事後には、娘が宿題をしたりテレビゲームをしたり家族がそれぞれの家に帰ることなく、就寝までの時間を過ごしていた。



写真：ゲル内の家具や電化製品（出典：上野研究室）

<感想>

ホームステイをして一番感じたことは、ゲルによって家族の繋がりが強くなっていることだ。ゲルには、一人ひとりの個室などは無く、狭い空間で家族全員が暮らしている。そのことによって、もちろん互いの交流が増える。アンケートからも分かるように、家族全員が「幸せと感じる時」に、親戚や友達が集まって食事やお喋りをしている時という回答をしている。プライベートな空間は無いものの、家族の繋がりという点においては、理想的な家庭であると感じた。

また、娘のブブちゃんやおばあちゃんは、とてもオシャレに気を使っていた。朝、学校に行く時には化粧をし、髪の毛を巻き、かわいい服を着ていた。

日本の生活をしている私たちにとっては、全ての体験が驚きであり、感動であった。一見、不自由だと思えるかもしれないが、生活に必要なものは全て揃っていて、いかに自分たちが不必要なものに囲まれて生活しているかを気づくことができた。日本から来た見ず知らずの日本人を歓迎してくれ、モンゴルの生活を体験させてくれたことに心から感謝したい。

(文責：中村絵夢)



写真：トゴーさん宅の敷地内にて（出典：上野研究室）

物置
 流し台
 キッチン
 ベッド
 テレビ
 机

棚 升田・芝田の家庭

ドア

<家族構成>

母と長男の2人暮らし

二男家族はウランバートル市内にて

玄関

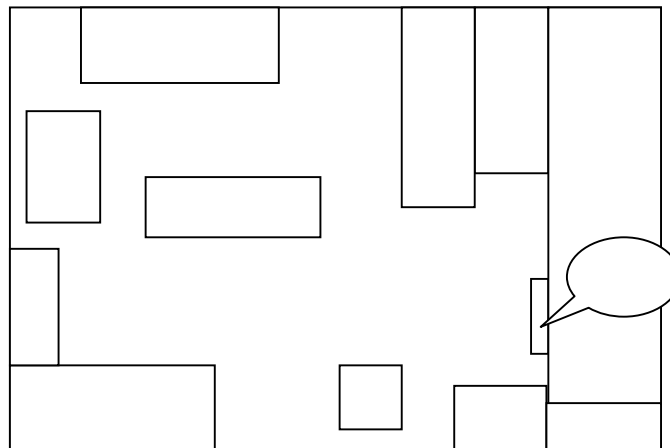
<住環境>

この家庭はゲルではなく、普通の平屋であった。家の中には、洗面台、キッチンやベッド、テレビなど何不自由なく暮らすことのできる環境であり、とてもきれいにされていた。しかし、下水道は完備されておらず、洗面台はペットボトルに溜めた水を少しずつ使い、トイレは家の外で地面に穴を掘って木の柵に囲われただけの簡易トイレであり、夜になると真っ暗で危なかった。また、停電が頻繁に起きるようで、私たちの滞在中も何度か起こっていた。



写真：家の様子（出典：上野研究室）

<家の間取り>



<食事>

おばあちゃんは、日本のおばあちゃんと同じように私たちが家に入ってすぐにモンゴルティーやモンゴルの伝統菓子・菓子パンなどたくさん用意してくれ、本当の孫が来たように接してくれた。

暗くなると夕食タイム。

お皿山盛りのモンゴル伝統料理「ボウズ」や、キムチと自家製のピクルスも出していたとき、「残すということはモンゴルでは失礼にあたるのよ」と笑いを交えながらおばあちゃ

んは「たくさん食べなさいね」としきりに促してくれた。その自家製ボウズの味は、日本人の私たちの口にも合う薄味でお肉の素材の味が生きたもので、キムチやピクルスととても相性も良く、2人で本当においしくいただいた。



写真 左：ボウズを作るおばあちゃん、右：夕食（出典：上野研究室）

その後、中村さんと西本さんのホームステイ先でもある隣のゲルにお邪魔した。このゲルは私たちのホームステイ先と親戚関係にあったのでとても親切に招き入れてくれ、またその家のボウズもいただいた。やはり家庭ごとに違うのか、さっき食べたものよりも少し塩気があり、また違った美味しさだった。



写真：隣のゲルのトゴーさん宅（出典：上野研究室）

そして、家に戻るとおばあちゃんの二男家族が幼稚園くらいの長男と8カ月くらいの双子の赤ちゃんの子供たちを連れて遊びに来て、とてもかわいらしい子供たちと一緒に遊んだ。



写真 左：二男の長男、右：双子の子供たち（出典：上野研究室）

この子供たちのお父さんでもある二男さんは日本に出稼ぎにきたこともあり、日本語がしゃ

べることができるようだった。そして、皆さんしきりに東日本大地震のことを心配して下さり、モンゴルの方々の日本のことを想う優しさを感じた。

9 時くらいになるとおばあちゃんはウランバートル市内の病院にお見舞いに行くからと二男家族と一緒に市内へ行ってしまった。おばあちゃんとはとても短い間の交流だったが、本当の自分のおばあちゃんの家に来たかのように親切にしてくださり、最後一緒に写真を撮ってもらってお別れをした。

翌朝、おじさんが羊肉と麺の入ったスープを朝ごはんとして用意してくれた。この羊肉はくせが少なく、とても食べやすいものだった。朝ごはんを終えるとおじさんがおばあちゃんから預かったチョコレートなどのお菓子を手渡してくれ、そして、「来年も来るなら私の家にまた来てね」と笑顔で言ってくれて、本当に嬉しく思い、最後の別れを惜しんだ。



写真：おじさんとおばあちゃんとの記念撮影（出典：上野研究室）

<感想>

この家庭で 1 日一緒に過ごさせていただき、モンゴルの人々が本当に家族を大事にする気持ちが伝わってきて家族の絆の大切さを改めて感じた。この家庭はゲルではなかったが、ゲルと同じように個室に分かれておらず、家族がみんないつも顔を合わすことのできる構造であり、ここがモンゴルの人々の家族を強く思う心が生まれる原点なのだろうと思った。またそのような場に私たちを快く受け入れてくれたことに本当に感謝している。



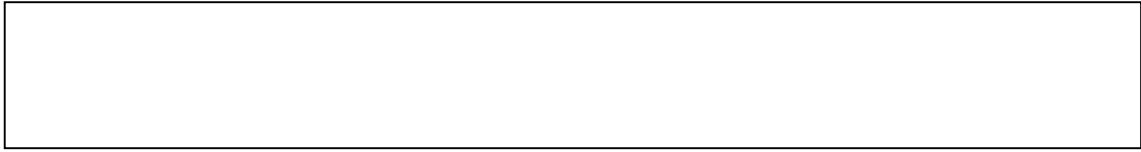
（文責：升田有香）

写真：家族団らん（出典：上野研究室）

5. アンケート調査 ―国民性を知る―

場所：各ホームステイ先

日時：2011年9月7日



<はじめに>

研修前にアンケートの担当となった樋口・中村・高橋の3名がアンケート内容を考えた。私たちは、国によって考え方や感じるが違うのではないかという国民性に興味があったため、下記のようなアンケート内容に決定した。

アンケート調査は、時間が空いているときにスフバートル広場等でアンケートを実施する予定だったが、スケジュール上、また通行人では時間をかけてじっくり話を聞くことが困難なのではないかといった理由から、ホームステイ先でアンケートを実施することにした。アンケートの際には各チームに一人ずつ通訳者がつき、通訳者を通してアンケート調査を行った。また、ホームステイ・通訳者の手配は日本語翻訳者のジャブザンジェルガルさんが行って下さった。

<目的>

日本は先進国、モンゴルは途上国であり、モンゴルのほうが日本よりも生活は貧しく、技術や教育が不十分かもしれない。しかし、家族を大切にし、国を愛し、自然を愛し、家畜を大切にする「心」という面で豊かな国といえるのではないか。それを知るために、今回の研修でアンケートを実施することにした。

<アンケート内容>

- ・基本情報（家族構成等）
- ・いま幸せですか。
- ・幸せと感じる瞬間は何ですか。
- ・次の中からあなたの大切なものを一つ。
(家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他)
- ・自分がより幸せになるために必要なものは。
- ・自国の誇り、また改善すべき点は何ですか。
- ・あなたの夢は何ですか。

<仮説>

モンゴルは途上国で生活は貧しいかもしれないが、家族を大切にし、家畜を大切にして心は豊かなのではないか。かつては羊などの家畜が生活の中で一番大切と聞いたが、今とんでもそのような考えは根付いているのではないだろうかという仮説を立てた。

<アンケート調査の結果>

※チームによってはアンケート内容が変わっている。

1. 樋口・沈チーム

アルタンゼルさん一家のアンケート結果（通訳者：ダミーさん）

Q：いま幸せですか。

A：幸せです。

Q：次の中からあなたの大切なものを一つ。

（家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他）

父⇒家族。モンゴル人の優先順位は第一に家族。少ないモンゴルの民族に

子どもが生まれることは大変ありがたいこと。仕事を放りだして家族を優先することもざらにある。そして、女性は仕事をずっとできる。子どもを生む直前までやっているのがその証拠。日本は、仕事が一番でしょ。

沈⇒そうではなく、家族を守るために仕事を真剣にやらざるを得ないのだ。

父⇒しかし、家族への絆は本当に大きい。家族の写真を財布に大事に持っている。

それがこの国では当たり前だ。

Q：自国の誇り、また改善すべき点は何ですか。

A：誇りは、長い間培われたこの国の歴史、文化。広大な土地、家族が仲良く助け合える環境。

Q：あなたの夢はなんですか。

母⇒娘が立派に育つこと。牛のビジネス事業をもっとうまくいかせ拡大させたい。

長女⇒日本に行くこと（だが今 3.11 の地震でやめた）

次女⇒高校を卒業してから、大学に行きでお医者さんになること。

その他

・恋愛観：学生時代、学校で気になる子がいたら、家までつけて、声をかけ、振り向かせる。今もこの文化は基本的に若者に見受けられる。男女の結婚のゴールはとてもはやく、これは平均寿命が 60 歳ということが関係しているのかもしれない。

・離婚率の上昇：近年、離婚率が上昇している。バイラさんは、女性が力を持ち始めたから、男性に愛想を尽かすと言っていたが、ダミーさんは、日本や韓国中国に仕事を求めて離れて暮らし、その間にさみしくなって違う人と結婚するという。これが離婚と関係している。基本的に家族の絆は強いという。

・**食べ物**：川には昔からサトウという魚が生息（北海道にもある）。モンゴル人にとって魚は神聖な生き物。国旗の中にも組み込まれている。その理由は鱗がないことにある。目を閉じずに国を守り続けている存在なのだそうだ。

感想

アンケートを通して、その国の根本的な考え方を知ることが出来たらと思った。個人的な意見として、やはり日本とは違うところがあり、興味深かった。モンゴルの厳しく、本気で向かわなければ越えられない環境を一緒に頑張った仲だからこそ、絆が深くなるのかと思う。例えば、ホットミルクを作るのを待つ間のゲルの中でさえ、本当に寒く、ミルクを飲んで感動を覚えた。苦しく厳しいプロセスがあると感動はどんどん増える。きっとそれがモンゴルにはたくさんあるのだろう。これが家族の絆をより深くさせるのだと感じた。

2. 淋・中西チーム

家族の名前不明（通訳者：バヤスガランさん）

Q：幸せと感じる瞬間はなんですか。

父母⇒家族で出かけるとき、家族と一緒にいるとき。

子供⇒好きなものを買ってもらったとき。

Q：次の中からあなたの大切なものを一つ。

(家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他)

A：家族

Q：あなたの夢はなんですか。

A：近い目標はお金を貯めて家を建てること。

感想

印象的だったことは、パパママはもちろん子どもたちも靴（冬のブーツ）の模様をミシンで刺繍したり切ったりという作業をしていた。パパの「自分だけではなく、ママや子どもたち含め家族4人で靴を作っているんだ」という言葉。

そして、家族の結びつきの強さ。決して裕福ではないのに、自分たちのご飯そっこのけで私たちにふるまってくれる温かい気持ちが本当に嬉しかった。その反面、パパママ子どもたちが靴作りの作業を一生懸命している傍らで、くつろぐ自分に対して複雑な気持ちになった。ただ、ゲルの生活を経験したいという動機で、ホームステイをさせてもらい、温かく迎えてくれたパパママに自分たちの疑問を投げかけることしか

できない自分にもやもやした。このホームステイは、ただの自己満足ではないかと。でも、この状況をたくさんの人に伝えること、パパママの話から、現地の人が本当に望んでいること（例えば、子どもたちに良い教育を与えること）を叶えるために自分ができることがある。それを実現させる。長期戦だけど、少しでも変化をもたらすことが大切だと思った。

3. 綿谷・志熊チーム

ビャンブさん一家のアンケート結果 （通訳者：ソロンゴさん）

Q：いま幸せですか。

A：：幸せ。見たまんま！

Q：幸せと感じる瞬間はなんですか。

A：子どもたちが家に帰ってきて、みんなが家に集まる時。

Q：次の中からあなたの大切なものを一つ。

(家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他)

A：住んでいる環境。自然が豊か。広い、景色が良い、牛もいる。

Q：自分がより幸せになるために必要なものは？

A：これ以上に幸せになろうとはあまり思わないけれど、あえて言うなら、自分の子どもたちが、子どもを生み、孫が増え、また自分の家に帰ってきてくれること。お金はいらない。

Q：自国の誇り、また改善すべき点は何ですか。

A：誇りは、広大な土地、家畜がたくさんいること。人があたたかい。
改善すべき点は、ウランバートルの大気汚染。ストーブから出る煙。

Q：あなたの夢はなんですか。

A：老後に子どもや孫たちが自分の面倒をみてくれること。

4. 中村・西元チーム

トゴーさん一家のアンケート結果 （通訳者：ハリボルトさん）

Q：いま幸せですか。

A：はい。健康だから。

Q：幸せと感じる瞬間は何ですか。

A：家族みんなで集まる時。全員9人でいて、週に1回は集合して、ごはんを食べたり、話したりすること。(娘のブブちゃんに聞いても同じ意見だった。)

Q：次の中からあなたの大切なものを一つ。

(家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他)

A：家族 (の健康)。

Q：自国の誇り、また改善すべき点は何ですか。

A：誇りは、歴史、自然、チンギスハーン。モンゴルという名のつくもの全て。
習慣、歴史、自然。

Q：あなたの夢は何ですか。

おばあちゃん⇒アパートに住みたい。

父⇒娘たちに大学を卒業させてあげたい。

子供⇒中国語の通訳の仕事に就くこと。

その他

Q：日本のイメージとは。

おばあちゃん・子供⇒わからない。

父⇒電化製品の質が良い。よく発展した国。よく働く。時間を守る。

感想

やはり、家族を大事にしている。それから、好きでゲルに住んでいるのではないということ。

5. 芝田・升田チーム

ジョズルさん一家のアンケート結果 (通訳者：ブルテさん)

Q：いま幸せですか。

A：もちろん

Q：幸せと感じる瞬間は何ですか。

A：兄弟やお母さんと一緒にいるとき。

Q：次の中からあなたの大切なものを一つ。
(家族・恋人・自分・金・住んでいる環境・その他)

A：父⇒自分の奥さんと2人の娘。

Q：自分がより幸せになるために必要なものは何ですか。

A：このままで幸せ。

Q：自国の誇り、また改善すべき点は何ですか。

A：世界で1番えらい。歴史的に、いろんな意味で。

改善すべき点は、ゲル地区をなくして、アパートを増やせばいい。

Q：あなたの夢は何ですか。

A：自分の子どもを結婚させて、孫の面倒をみること

<反省とまとめ>

まず反省点として、質問内容が難しくかつ質問しにくい内容がいくつかあったことがあげられる。その結果、チームによって質問できなかった項目があるという全体的に一貫性のないアンケート調査になってしまった。また、アンケート対象が5つの家庭のみで、多くの方々にアンケート調査をすることができなかったため、アンケートの信頼度が低い結果になったことが反省点である。

しかし、家庭を対象にしたことで、子供からお年寄りまで様々な世代の方々とじっくりと話すことができた。また調査により、家族の大切さ、自然の大切さ、日々のありがたみを直接感じ、自分たちの生活を改めて考え直すきっかけにすることができた。

(文責：高橋亜里沙)

名簿

教授

上野 真城子 Prof. Makiko Ueno

アドバイザー

Mr. Badruun Gardi(Zorig Foundation)

研究科卒業生

島末 喜美子 Kimiko Shimasue

ゼミ生 (3 回生)

岩崎 麻里 Mari Iwasaki

志熊 沙紀 Saki Shikuma

芝田 真子 Mako Shibata

淋 翔太郎 Shotaro Sosogi

高橋 亜里抄 Arisa Takahashi

沈 洋 Shen Yang

中西 美帆 Miho Nakanishi

中村 絵夢 Emu Nakamura

西元 有希 Yuki Nishimoto

樋口 潤哉 Junya Higuchi

升田 有香 Yuka Masuta

綿谷 梨花 Rika Wataya

モンゴル研修報告書 2011

2011 Study Tour, Mongolia

編集 関西学院大学 総合政策学部 都市政策学科

上野研究室 2011 年度研究演習 I

〒669-1337 兵庫県三田市学園 2-1

TEL/FAX: 81-79-565-8157 E-mail: makikoueno@kwansei.ac.jp

School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University.

1 Gakuen 2 chome Sanda, Hyogo 669-1337 Japan